



渋川市20周年記念事業

ふるさと渋川再発見事業

渋川郷学

5人の師匠たち展

web版

渋川市教育委員会（生涯学習課）

渋川郷学 5人の師匠たち展 web版

目次

はじめに	1
・渋川郷学について	
吉田芝溪	2
・芝溪の概要 ・芝溪の著作 ・芝溪に影響を与えた山崎石燕	
周休竹溪	6
・周休の概要 ・周休と漢詩 ・周休が住職をつとめた寺	
木暮足翁	11
・足翁の概要 ・足翁と渋川郷学 ・医師を志した足翁	
高橋蘭斎	15
・蘭斎の概要 ・蘭斎の医学の師宇田川榕菴 ・蘭斎と合作掛け軸 ・蘭斎の和歌	
堀口藍園	20
・藍園の概要 ・寸暇を惜しんで学ぶ藍園 ・実行を重んじた学問 ・理想を求めて行動した人 ・書道家としての藍園 ・染物屋主人としての藍園 ・藍園と漢詩 ・藍園と弟子たち	
渋川郷学 5人の師匠たち ～ゆかりの地めぐり～	29
おすびに	40

付録

- ・渋川郷学 5人の師匠 相関図
- ・渋川郷学 5人の師匠たちが生きた時代(年表)
- ・渋川郷学 師弟関係の系図
- ・渋川郷学 5人の師匠たち ゆかりの地めぐりマップ

渋川郷学 5人の師匠たちweb版について

ふるさと再発見事業の一環として、令和2年度から6年度にかけて、渋川郷学に連なる師匠たち、渋川郷学の始祖と言われる吉田芝溪から渋川郷学を大成したと言われる堀口藍園までの主たる5人の師匠たちを個別に顕彰する展示を開催してきました。令和7年12月には、集大成として過去の5人の展示で使用したパネルを中心に、再構成した内容を加えた展示をしました。その時の展示内容を編集したものがこのweb版です。

渋川郷学について

わたしたちの住む渋川には、今から200年から150年前の、江戸時代の末から明治のはじめにかけて、幾人もの優れた教育者が出て多くの子弟を教え導き、郷土の発展のために尽くしました。また教えを受けた弟子たちも、その教えを守り生かし、それぞれの郷土の発展に尽力しました。

その教えは開明的で、小さく閉じこもらず、進んで新しい学問知識に取り組みました。空理空論を排して現実の生活や社会に役立つことを重んじる、実学的な学問・学統で、のちに「渋川郷学」と呼ばれるようになりました。

渋川郷学関係の人びとは、一連の師弟関係で結ばれていますが、各々の主とする学問は漢学、国学、洋学(蘭学)と異なり、たしなんだ芸術も書、漢詩、和歌と様々でした。そして、職業も農業、医者、紺屋(染物屋)、僧、神職と様々でした。師匠たちに共通して言えることは、自分の職業を大事にし全力で取り組んだこと、学問を大切に勉強に励んだこと、詩歌や書道など芸術を大切に励んだこと、そして、世の中や人びとのことを考える人のためになる良い行いをするように努めたことでした。

渋川に生まれ、渋川に暮らし、郷土のために尽力した師匠たちの生き方、考え方、その深い学問などに弟子たちは多くを学び、また感激し、それが「自分も頑張ってみよう。郷土の名誉が失われないようにしよう。」という発奮、努力を続ける原動力になったと考えられます。師匠たちは多くの有能な人材を育て、また、弟子たちは師を大事にしました。今も市内には師匠の遺徳を偲んで弟子たちが建てた顕彰碑や筆子塚が数多く残っています。

「渋川郷学」という言葉は、戦前に渋川小学校長をした田部井鹿蔵がその著述の中で述べたものです。渋川市誌では、「おそらく郷土に根ざした特色ある教育と学問という意味で(田部井は)郷学という言葉を使ったのであろう」とし、渋川市誌文中においては、「郷学」という熟語を持つ歴史・教育史上の意味(郷学=江戸時代の教育機関の一種)を考慮して、「渋川郷学」ではなく「渋川の教学」という言葉、漢字を当てています。本顕彰展パネル解説文は渋川市誌を引用又は参照しているものが多くありますが、過去に開催してきた本事業顕彰展での解説と統一し、全て「渋川郷学」と表記します。

※群馬県史では、『「渋川郷学(きょうがく)」については、特定の教育機関を意味するのではなく、郷土の民衆に対する学問、教育の活動そのものを指すとされている。』と記載されています。出典：「群馬県史 通史編6」

○引用及び参考文献・・・「渋川市誌第2巻通史編・上」、「まんが渋川の歴史」、「郷土渋川第9号」、「堀口藍園先生物語原稿案(渋川北小所蔵)」



石碑「渋川」(渋川駅前広場)

吉田芝溪

寛延3年(1750年)-文化8年(1811年)

芝溪は、寛延3年(1750)に渋川村(中之町)の農業と系繭商を営む吉田甚兵衛の長男として生まれました。芝溪というのは号であり、諱は友直、字は子正、通称は宇助、襲名して甚兵衛を名乗りました。芝中(現御蔭地区)で開塾に当たったので、「芝中の先生」や「新田の先生」とも呼ばれていました。

芝溪の父は優れた学者に子どもたちを学ばせるため、芝溪が16歳の時に、弟の翠屏とともに北牧宿(現渋川市北牧)の学者山崎石燕の下で儒学を学ばせました。芝溪の学問に対する姿勢はとても真摯で、毎夜必ず『史記』を1巻読まなければ寝なかったほどと言います。

安永元年、父の死去に伴い家業の農業と系繭商を継ぎましたが、当時の系繭商仲間が悪い習わしで不正な秤を平気で使っていることを快く思わず、正義感の強さから矯正に努めましたが効果がなく、父の七回忌を機会に系繭商を辞め、水油商とたばこ商に転じました。

しかし、商いの傍ら学問に対する思いも断ちがたく、安永5年(1776)、27歳の頃に江戸へ出て、昌平黌の聴講生になりました。そこで儒学者井上金峨の講義を聴き、金峨がどのような質問にも即座に答え、大変博学であることに驚き、自分の至らなさを痛感したことから、その後、当時一流の学者とも交流を深めるようになりました。

昌平黌の学頭を務めた平沢旭山が天明5年(1785)に渋川に来遊した際、芝溪宅に3年あまり滞在しました。この間に旭山から、儒

吉田芝溪の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1750	寛延3	1	上野国群馬郡渋川村(現渋川市渋川(中之町))に生まれる
1760	宝暦10	11	弟「翠屏」が生まれる
1765	明和2	16	北牧宿(現渋川市北牧)の儒学者山崎石燕に弟の翠屏らとともに学ぶ
1770	明和7	21	渋川村を千ばつが襲う
1772	安永元	23	父甚兵衛が49歳で没する 家業の農業と系繭商を継ぐ
1776	安永5	27	この頃、昌平黌の聴講生となり、儒学者(折衷学派)井上金峨の講義を聴く
1778	安永7	29	妻をめとる
1780	安永9	31	系繭商を辞め、農業のほか水油商・たばこ商をする
1784	天明4	35	弟翠屏の子「大二郎」(のちの養子)が誕生する
1785	天明5	36	昌平黌の学頭を務めた平沢旭山が渋川に来た際、芝溪宅に3年あまり滞在する このとき、儒学、詩文、国学のほか、農業経済、養蚕、馬産や開塾などを学ぶ 領主の小笠原氏へ上书する 山崎石燕が没し、芝溪ら門弟が遺骨を引き取り雙林寺(現渋川市中郷)に葬る
1787	天明7	38	この頃周休竹溪が芝溪や翠屏に文書学などを学ぶ 芝中の開発に着手する
1789	寛政元	40	養蚕は科学的に行うことが大切であると記述した『養蚕須知』を著す 領主の小笠原氏に、翠屏らと連名で芝中の荒れた畑の再開発を願い出る 漢文体の小説『浴泉奇縁』を著す
1792	寛政4	43	幕府評定所へ箱訴(目安箱)を行い、領主の小笠原氏からとがめられる
1793	寛政5	44	弟の翠屏や小作人3人と芝中に移住する この頃から本格的に門弟の育成に当たる

学・国学・詩文から農家経営、養蚕、産馬や開墾まで学びました。

明和7・8年(1787・1788)に渋川村を襲った干ばつと天明の飢饉を経験し、その教訓を生かして芝中の開拓に取り組むこととしました。寛政5年(1793)、弟とともに芝中に移住し山林を開墾して畑を作り、周囲に桑の苗木を植えて(あぜ桑)養蚕の普及を促し、このことが芝溪の暮らしを支えました。また、この頃、開墾・米作・養蚕の傍ら私塾を開いて門弟の教育にも本格的に取り組み始めました。芝溪、翠屏の兄弟は同じ志で門弟を率いただけではなく、自ら先頭に立って学び、行い、その学徳は遠くの村にも及び、野良犬村(現前橋市)や金古村(現高崎市)から夜道を通い、教を請いに来る者があったほどでした。2人の下には有能な弟子が集まり、門弟の中には木暮足翁、周休竹溪など、後の渋川の教育・文化に影響を及ぼす学者も生まれました。

芝溪が実践したのは、進んで新しい学問知識に取り組み、現実の生活や社会に役立つことを重んじた実学でした。この郷土に根ざした特色ある学問は後年「渋川郷学」と名付けられ、芝溪は「渋川郷学の祖」と位置づけられるようになりました。

芝溪は実際に自分が体験した養蚕と農業の知識を活かし、『養蚕須知』『開荒須知』などの農業指導書を著しました。「須知」とは「知らなければならないこと」という意味で、どのような農民でも読めるようにと、序文以外はすべて仮名入りの文書にし、難しい漢字にはふり仮名もつけるという周到ぶりでした。自身の経験に基づいて書かれたこれらの書物は説得力のある記述であり、昭和に入ってから復刻され活用されるほどでした。

多くの門弟や農民に慕われた芝溪は文化8年(1811)、芝中で没しました。享年62歳。墓所は渋川市渋川(御蔭)に2か所あり、ともに群馬県指定史跡となっています。

西暦	和暦	年齢	できごと
1795	寛政7	46	荒れ地の開墾は農業振興に最適であることを記述した『開荒須知』の原稿ができる
1796	寛政8	47	この頃から南横町の木暮足翁が芝溪・翠屏兄弟に漢詩文を学ぶ
	寛政年間		子弟に孔子の教えの正しさを理解させようとした『辨学寮東塚』を著す
1805	文化2	56	弟の翠屏が46歳で死去 法名「寒巖道林居士」 水戸藩主へ提出のため『開荒須知』を再編する 水戸藩主に召され、木暮足翁を同伴して水戸へ赴き『開荒須知』『養蚕須知』を献上する
1806	文化3	57	養子の大二郎(弟の翠屏の子)が妻子を残し死去
1810	文化7	61	現前橋市総社町の二子山古墳など4古墳を実地踏査したうえで記述した『上毛上野古墳記』を著す
1811	文化8	62	6月19日 痢を病んで芝中にて62歳の生涯を閉じる 法名『傑叟復英居士』

*年齢は数え年とした



【御蔭にある芝溪の墓】



【藍園が建てた芝溪の墓への道標】

吉田芝溪の著作

多くの著作を残す芝溪

吉田芝溪は文章の才能豊かで複数のジャンルにわたって著作を残しています。富岡地方に講義のため招かれた際も「私は文章が得意なので招かれた」と自分でも話すほどの文章上手です。現代に伝わっている著作を紹介します。

作品集

『芝溪文稿』 丙・丁・戊・庚の4冊が伝わり54編の旅行記・感想文・門弟に与える書など収録されている。甲乙については所在不明。

思想書

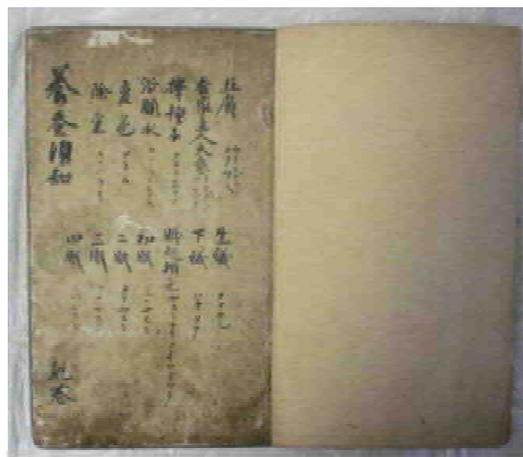
『勉学遼東冢』 表題は、中国の故事を引用した、自分の儒学の見識は狭いものだと弁えていますという、謙遜した意味の題名。子弟に孔子の教えの正しさを理解させようとしたもの。特に当時の官学である朱子学を批判している。

実用書

『養蚕須知』 芝溪が寛政元年（1789）に著した農業指導書。その後芝溪自身が改訂したことも考えられる。平沢旭山の指導と、養蚕農家でもあった芝溪が実際の経験を基に著したと言われる。原本は「乾」「坤」の2巻構成。誰でも読めるようにと平易な言葉で書かれている。

『開荒須知』 芝溪が寛政7年（1795）に成稿した農業指導書で「日本能書全集3」にも収録されている。「開荒」とは「荒地を再び開墾する」という意味で、「開墾のすすめ」ともいえる本である。乾・坤の2巻からなる。

『救荒須知』 芝溪の著した農業書と伝わっているが、残念なことに「救荒須知」は現存していないため、その内容の詳細は分からない。



【「養蚕須知」原本 後藤善郎氏所蔵】

古墳関係

『上毛上野古墓記』 現在の前橋市総社町植野にある4つの古墳の被葬者を、『日本書紀』の記事を引用して、豊城入彦命、彦狭島王、御諸別王などと推定している。皇族の陵の荒廃ぶりを嘆いている。

小説

『浴泉奇縁』 長岡（現・新潟県長岡市）の女性が事情があって伊香保温泉に流れ着き、そこで知り合った2人の客との間の出来事を綴った、漢文で書かれた小説。

吉田芝溪に影響を与えた 山崎石燕

宝永6年(1709年)-天明5年(1785年)

山崎石燕は、北牧宿(現渋川市北牧)で問屋を営む山崎八郎左衛門の分家、重郎左衛門の二男として生まれました。石燕(ほかに君山、吾川、臥雲亭)と言うのは号であり、通称は源蔵、諱は興虎、字は子虎と言いました。

幼い頃から学門を好み、下仁田村の高橋道齋に国学を、後に江戸に出て井上金峨に儒学を学びました。帰郷後は地元で塾を開き、基礎的な学問を教えるなど子弟の育成に尽力しました。その中には吉田芝溪・翠屏兄弟もおり、芝溪のその後の学問の歩みに影響を与えました。その学風は、実業や生活に結びついた実学を重んじたもので、現実の生活や社会に役立つものでした。

石燕は江戸で儒学を学ぶ傍ら狩野派の絵師とも交流をもって絵画を学び、人物画を得意としました。気品高く描かれる石燕の絵は郷里の人々にも評判が高く、請われるままに描いたであろうたくさんの画軸や屏風絵が、現在でも市内に数多く残っています。

天明3年、石燕が75歳のとき浅間山が大噴火を起こしました。その被害は北牧宿にも及び、石燕の家も泥流に流されてしまいます。このときの様子が『浅間山大変実記』という書物に「爰に牧の石燕先生と云篤実の君子有りけるが…此先生、七月七日数々書物を干されけるが、座敷へ一ぱいなる故、そこそこにかたづけ置けるに、八月の大変、家屋敷の跡形もなく流失して、只腹中の書のみ残されしは扱々おしき事ども也」と書き記されています。こうして家を失った石燕は江戸へ出て、塾(臥雲亭)を開きました。

著書として、中国の聖賢の道を説いた『蒙求解』や、人生観を述べた『独語』などがあります。

天明5年、江戸で77歳の生涯を閉じた石燕の葬儀は、吉田芝溪ら門弟により盛大に行われました。墓は渋川市中郷にある雙林寺に建てられ、市指定史跡となっています。



【市指定史跡 山崎石燕墓所 雙林寺境内】

周休竹溪

安永4年(1775年) - 嘉永7年(1854年)

周休は、安永4年(1775)に群馬県勢多郡持柏木村(現・渋川市赤城町持柏木)の草葉姓の家に生まれました。

5、6歳の頃は他の子どもと同じように一日中遊び回っていましたが、10歳の頃には身体が虚弱となり、天明5年(1785)には剃髪し、極楽院西善寺の二十五世周弁の弟子となりました。

「周休」の名は、師の周弁から一文字賜ったものと言われています。

その後は、寛政7年(1795)に江戸にある東叡山学寮で仏教や経史等を8年間学んだ後、文化元年(1804)に渋川の遍照寺の住職となりました。号の「竹溪」は、遍照寺の南の小溪谷に竹が数多く生えていたことが由来とされています。

住職となって9年後の文化9年(1812)、遍照寺は火災で全焼してしましますが、再建して心身ともに余裕を得た後は、詩を作ることを楽しみとしていました。日常生活の中でも、弟子や知人から季節の物を贈られた時は、喜んでその情を詩にして謝意を表しました。また、干ばつや大雨で収穫が激減した時は、自分のことのように同情し、長詩を作って慰めていました。

文政13年(1830)には『竹溪小稿』、天保8年(1837)には『小稿続篇』といった作品をのこしています。

天保13年(1842)には遍照寺を退き、石原の石原寺に移りました。2年後には中村の延命寺へ移り、嘉永7年(1854)にその生涯を終えるまでの日々を過ごしました。幼少期から多病であった周休は、「医学もよく研究し、近隣に貧しく病む者人がいると無料で診断し投薬しつつ、その知識をもって自らの寿命を80歳まで保つことができた」と言われています。

周休竹溪の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1775	安永4	1	群馬県勢多郡横野村(現・渋川市赤城町持柏木)に生まれる。
1785	天明5	11	西善寺にて剃髪し、周弁の弟子となる。
1787	天明7	13	檀林郷校に入り、8年間仏教を学ぶ。
1795	寛政7	21	上野東叡山学寮に入り、8年間仏教や経史等を学ぶ。また、この頃、佐々木琴台に漢詩を学んでいた。
1804	文化元年	30	遍照寺の住職になる。
1812	文化9	38	遍照寺が火災に遭い、全焼する。
1817	文化14	43	遍照寺の客殿、庫裏を再建させる。その後も寺内を整備した。
1830	文政13	56	『竹溪小稿』を刊行する。
1837	天保8	63	『小稿続篇』を刊行する。
1842	天保13	68	遍照寺を退隠し、石原寺へ移る。
1844	弘化元年	70	延命寺へ移る。
1854	嘉永7	80	延命寺で死去。遺骨は遍照寺に葬られた。

○主な参考・引用文献

- 『群馬県勢多郡横野村誌』群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会(昭和31年9月10日発行) / 『江戸時代の渋川に生きた周休上人の詩的世界』しながわいほう ちよ (平成25年6月1日発行) / 『渋川市誌第2巻』渋川市誌編纂委員会

○年齢は数え年です ○年代は前後することがあります
※この年表は、渋川市誌をもとに作成しました
※発年・月日は、延命寺門前の周休塔の刻字を参考にしました

周休と漢詩

周休は、幼い頃はわんぱくでしたが、10歳頃から体が弱くなり、ひとりで物思いにふけり、「幽寂」(奥深く物静かなこと)を好むようになりました。11歳の時に両親の快諾を得て、西善寺(赤城町持柏木)にて祝髪(髪を剃って仏門に入ること)し、周弁の弟子となりました。

その後、仏典以外にも様々な勉学に励み、漢詩においては、時には師として、時には雅友として、当時の名士と交流を行いました。遍照寺の住職となっても、寺務の合間に吟詠にふけり、自身を慕う人々と互いに詩を贈り合いました。

文化9年(1812)に遍照寺が火災に遭ってからは、寺の再建まで文筆や吟詠をやめました。再建後は心身に余裕が生まれ、吟詠を楽しみました。周休の作品は、50歳を越えてからのものが多く、文政13年(1830)に『竹溪小稿』、天保8年(1837)に『小稿続篇』等を刊行しています。

周休は漢詩に対して、「詩は高尚な精神を詠むもので、この一作ですべてを尽くしている。ただ真情に近い作が真の詩である」と述べており、その作品は、江戸後期に活躍した漢詩人の菊池五山や梁川星巖を始め、多くの名士から高く評価されました。

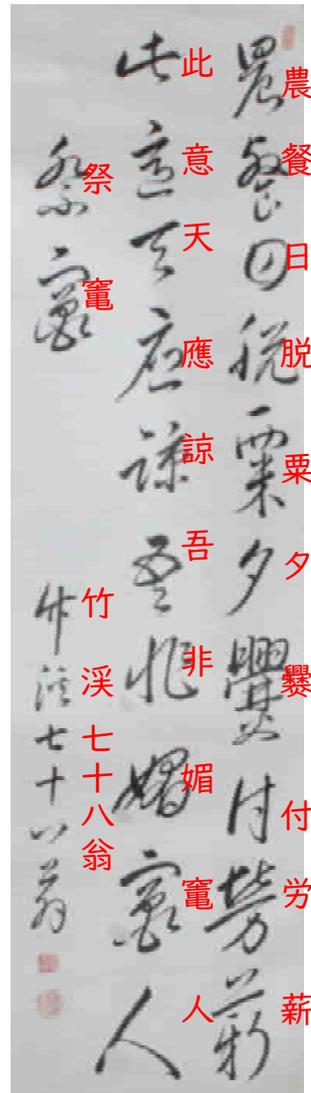
○主な参考・引用文献

群馬県勢多郡横野村誌編さん委員会(1956)『群馬県勢多郡横野村誌』

○主な参考・引用文献 無学集 訳注(岸 八一訳・註・書 松村典三(1986))

【書き下し文】
農は日に脱粟を餐べ
夕爨には労薪を付る
此の意天應に諒とすべし
吾竈人に媚びるに非ず
祭竈 竹溪七十八翁

【訳】
農家では毎日玄米を食べている
夕方にご飯を炊くがその時に荷車を
析いて作った薪を祠にまつる
この意は天神もまことの気持である
ことを知って居られる
私は今この竈を扱ふ人の機嫌をと
る為に言っているわけではない



【掛け軸(遍照寺所蔵)】

周休の漢詩「祭竈」

周休が住職をつとめた寺

遍照寺

①38年間を過ごした

光明山 常楽院

(並木町)

文化元年（1804年）、周休30歳で遍照寺第12世住職となりました。文化9年（1812年）、38歳のとき、病床にいて寺の火災にあい、過去帳は取り出されましたが寺は全焼。好きな文筆も吟詠も慎んで、ひたすら寺の再建に努めました。再建後、68歳までを遍照寺で住職をつとめながら、旅に出て名勝・古跡をたずね、また、文人と交流。多くの漢詩を詠じました。



<周休がのこしたもの>

・周休寿塔 (寿塔：じゅうとう=生前に建てた塔)

本堂の前方、西脇にあります。周休が天保7年（1836年）に自身の寿塔をつくりました。正面に光明十有二世豎者法印周休塔、側面・裏面に「無學道人傳」と記した自伝で自ら撰文。友人で当代随一の書家と言われた越後の巻大任(菱湖)の書により刻字されています。



光明十有二世豎者法印周休塔

学びに未だ其の要の有る所を窺ふことを得ず…即ち此の自ら無学と称する所以なり



「無學道人傳 道人名周休…」
 寿塔側面・裏面の三面に、周休の生い立ち、遍照寺の再建に尽力したこと、仏典のほかに各方面の学問も勉強したが最も漢詩に熱心で多くつくったこと、無学と称した所以など周休が自ら撰文した自伝が刻字されています。(刻字されている原文は漢文、句点無し、旧字です)

無学道人伝
 道人名は周休 字は無学 俗姓は葉氏 上毛勢多郡柏木の里の人なり、幼にして幽寂を愛し、群兒と遊嬉せず、年甫めて十一、自ら里の極楽院に詣り、薙髮して僧と為る、院の住持周師は碩徳の人なり、其の幼にして道に志せしことを憐れみ、予を撫すること子の如く、提撕すること至らざる所なし、東西遊方して、勤苦すること亦年有り、然れども根機鈍滞にして、僅に其の崖略を得るのみ、竟に円頓真如の實際に超え入ること能わざるなり、又旁ら外典及道藏を窺がい、凡そ遇ふ所あれば必ず瀏覽す、性尤も詩に耽けり、頗る題詠あり、壮年にして東叡より歸りて、錫を渋川の遍照寺に挂く、經禪の暇、行きては吟じ、座しては嘯ふく、從遊するもの亦多し、互に相唱酬して以て娛樂と為す、是の如くすること十年なり、偶ま舞馬の禍に罹り、寸椽も遺すなし、是に於てか土木の役に從事せざるを得ず、数年の間、拮据執筆し、管城御せず、詩囊も從う無く、爽然として自失す、影を顧みれば復故の吾れに非ざるなり、既にして宮建粗全く、栖托從ふ所を得たり、是れより後、風を嘲けり月を弄し、悠爾として自適し、塵事の其懐に(かゝる)を知らざるなり、今は己に老いたり、頭顱蒼然たれども、猶且つ鬚を捋り頤を支えて、推敲して休まず、嗟乎嗜好の深き、未だ碧雲佳句有らざる、湯沐の流と謂わざるべけんや、但し其学ぶ所、駁雜にして曼衍、統紀有ること無し、以て憾みと為すのみ、嘗て其徒に謂て曰く、吾の学に於けるや、乍仏にして乍儒、或は莊、列、或は医卜、亦惟泛然として涉獵せり、学びに未だ其の要の有る所を窺ふことを得ず、故に身を終る迄事に従ふも、未だ学ばざるものと、以て異なることなし、即ち此の自ら無学と称する所以なり、居常麻衣草坐して、未だ嘗て知らるゝことを僧綱、紫緋の流に求めず、塔を寺門に起し、自ら、終に僻壤に老ゆ著わす所竹溪小稿若干編あり、之を篋衍に蔵すと云ふ、釈、周休撰
 天保七年丙申夏四月 新鴻巻大任書

(引用・参考文献 横野村誌)

・本堂

周休の代に再々建された本堂が現存。妻入で豪華な彫刻を組んだ唐破風の向拝部があります。向拝部には高橋蘭斎揮毫による扁額が掲げられています。



高橋蘭斎揮毫による扁額

「竹溪」について… 遍照寺の南には、戦国時代に「渋川の寄居」といった城址がありました。この寄居のかつての外郭に深さ数丈（1丈は約3m）、長さ百余間（1間は約1.8m）の小渓谷があつて明治初年までは竹林が茂っていたと伝わっており、周休は竹が茂る溪谷の景色から「竹溪」と号したのでは…と考えられています。

～遍照寺から石原寺へ

② 2年間を過ごした

光徳山 こうとくさん

孝顕院 こうけんいん

せ き げ ん じ
石原寺

(石原)

天保13年(1842年)、周休68歳のとき、遍照寺を退隠し石原村の石原寺住職となりました。石原寺に移ったあと、「退光明山寺」「石原新居」などを詠じました。



石原村へ転居した頃に周休が詠じた詩 (『小隠集』巻上)

附碧菜正
與瑠花是新
山璃麥春居
僧地浪光所
詩黃滿欲見
幾金平盡
篇界田天

時此杯厨樹苔再一
有閒如不古蒸来宇新
山幽常妨池林ト蕭居
禽趣禁空頭下地然雜
喚無酒農洗題亦傍詠
午人家圃硯詩因竹
眠問懸近泉虞縁邊

只老移新
待来松命石
風不幾山原
濤望樹僮新
月千傍修居
影霄柴竹
時色扉籬

弄自後同野如麻本
花怪輩遊鶴何衣是退
嘲病少墳山林草一光
月翁年墓猿下坐瓶明
半猶皆多惜經足一山
生未抱拱別年容鉢寺
癡死兒木頻久身人

為 貧 官
龜 吏 米
曳 與 富 貴
尾 困 小 私
泥 清 民 米
中 水 窮 賤

『小隠集』巻上

俚歌

この頃詠じた詩とともに小隠集には俚歌(りか:世間の流行歌)を入れており当時の世情をあらわしています。周休のおもいも同じだったからでしょうか。

※「尾を泥中に曳く」

そうじ しゅうすい
莊子「秋水」:士官を求められた莊子が「龜は殺されて占いの具として珍重されるより、泥中に尾をひきずってでも生きている方を望むだろう」と答えた故事から。

仕官して束縛されるより、貧しくとも自由な暮らしを望むたとえ

※小隠集の詩は国書データベースに掲載されている「小隠集」から書き写しました。異体字などの解説・漢字変換の誤り等がありましたらご容赦ください。

<周休も眺めたであろう...石原寺付近の水辺の景色>

石原寺敷地内に、金井岱路(加舎白雄の門人)が寛政12年(1800年)に建立した芭蕉句碑「草の葉を落るより飛蜚哉」が残っています。また、明治19年(1886年)に大山祇神社に奉納された石原八景詩の一つに、当時の石原寺あたりでの川辺でのひとときを小淵信義(堀口藍園の門下生の一人)が詠じた漢詩「坊川暮色」があります。周休が石原村に暮らしていた頃、石原寺の近くには清い水辺があり(芭蕉句碑が建てられた当時の場所は石原村室(坊)川の清水際という)、周休も、蜚が飛ぶ夏の夜や雪がちらつく夕暮れ時の川辺の景色を楽しんだことでしょう。

石原寺に残る芭蕉句碑



～石原寺から延命寺へ

③ 10年間を過ごした

早尾山 はやおさん

薬王院 やくおういん

え ん め い じ
延命寺

(中村)

弘化元年(1844年)、周休70歳で中村の延命寺住職となりました。心に感ずるがままに吟詠に耽り、旺盛な作詩活動で、『竹溪三集』、『小隠集』を発刊しました。周休を師とし儒学及び詩文を学んだ堀口藍園は、疑問に思うことがあると夜中でも延命寺を訪ね教えをこうたと言います。



・周休塔

延命寺門前左側に「^{りつしやほういんしゆうきゆうとう} 竖者法印周休塔」が建っています。

裏面に周休の没年月日が刻字されていることから没後に建立されたと考えられます。



(梵字) 竖者法印周休塔



(表) 梵字部分拡大
(裏面) 嘉永七申寅天二月四日寂

※竖者：(仏) 論議の席上、出された論題に対して義を立て、質問者に答える僧
※法印：(法印大和尚位の略) 最高の僧位

周休の晩年

70歳を過ぎ、^{たいごってい} 全くの大悟徹底の域に達し、^{じんえん} 塵縁その心身を ^{わずら} 煩わすものもなく、奉仏のほか ^{かんうん やかく とも} 閑雲野鶴を侶として、時に心に感ずるままに吟詠に耽り、^{ちしき} 超然として世外に遊び真に高僧、^{おく} 智識の生活を営んだ「自ら貽る」と題してその心情を詠って曰く… (横野村誌より)

何ものにもとらわれない
心の赴くままに。

嘉永7年(1854年)2月4日、
周休80歳で遷化。
遺骸は寿塔がある遍照寺へ…

「^{こうが うんざんぼくせき きよ} 高臥す雲山木石の居
^{じんせい いちむくうきよ ぞく} 人生の一夢空虚に属す
^{すで こつにく しんねん わずら な} 已に骨肉の心念を煩わす無し
^{あ りめい きよ あずか あら} 豈に利名の毀誉に関する有んや
^{きょう み しへん そうはく あま} 筐に満つるの詩編は糟粕を甘んじ
^{はんけい しょうちくしやうぎょ こん} 半溪の松竹は樵漁に混ず
^{お きた なに そらん(そらい)} 老い来つて何ものをか疎懶に供す
^{つき うそ かせ ぎん すべ じじよ} 月に嘯ぶき風に吟じ繪て自如たり」

上記のほか周休ゆかりの寺々

・ 柏木山 極楽院 西善寺 (持柏木)

天明5年(1785年)、周休11歳のとき、剃髪して西善寺周弁和尚のもとで仏道・学問を修業。師の名を一字もらって周休とした。

・ 威徳山無量寿院 眞光寺 (並木町)

周休は眞光寺42世順海(寛政元年(1789)6月入寺-寛政8年(1796)7月13日逝去)に学んだとされ、周休が天明7年(1787年)から入って8年間仏教学を学んだ「檀林郷校」は眞光寺と考えられる。

・ 東叡山 寛永寺 (上野)

寛政7年(1795年)、周休21歳のとき、江戸へ出て東叡山学寮に入り8年間仏教や経史を学んだ。この頃佐々木琴台に漢詩を学んだ。

○「渋川郷学 周休竹溪顕彰展」開催にあたりお話をおうかがいした人、おもな引用及び参考文献等

遍照寺ご住職 長谷川広順様、延命寺ご住職 寺川行厚様、石原寺ご住職 千葉照峰様
渋川市誌第2巻、横野村誌、無学集、石像物と文化財、郷土渋川第9号、郷土渋川第20号、小池末廣著
「渋川市・北群馬郡の寺子屋師匠たち」、群馬の古寺北毛編、昭和60年渋川郷土カルタ刊行会発行「渋川郷土カルタ」、渋川市HP「旧 渋川市地区の指定文化財」、広辞苑

※周休年譜は、原則として、横野村誌に記載されている情報を参照。ただし、遍照寺の住職については渋川市誌を参照。また、没年月日は延命寺周休塔裏側に刻された「嘉永七年二月四日」としました。

木暮足翁

寛政元年(1789年) - 文久2年(1862年)

木暮足翁の生まれた木暮家は、渋川村南横町(現・渋川市渋川(南町))に住み、代々与左衛門を名乗る本百姓で、馬問屋を兼ねていました。足翁は、木暮与左衛門の長男として、寛政元年(1789)に生まれました。諱を賢樹・克信、幼名を谷五郎、通称は五十槻、襲名して与左衛門を名乗り、号は梅屋、のちに足翁と改めました。

8歳のとき、折原に住んでいた渋川郷学の祖・吉田芝溪とその弟である吉田翠屏の私塾に入り漢詩文を学び、数多い門弟の中でも特に優秀でした。足翁は吉田芝溪に師事したほかに、和歌を屋代弘賢に、漢詩を遍照寺住職の周休(竹溪)に学び、これらの教えをもとに私塾を南横町に開き、子弟の教育にあたりました。この私塾からは、高橋蘭斎、堀口藍園、狩野利房等の立派な教育者が育ちました。

文政12年(1829)に妻を亡くした足翁は、翌年の文政13年(1830)に医者になることを志し、名医として有名だった紀伊国和歌山の華岡青洲に入門しました。また、蘭学者としても高名な高野長英とも交流を持ち、オランダ医学を学んだとも考えられます。

渋川に帰郷した足翁は、医者として開業するとともに、門弟への教育も行いました。また嘉永6年にペリー提督率いるアメリカ艦隊が来航した際は、開国を促す建白書を幕府役人に提出しました。

足翁は、文久2年(1862)8月26日に74歳で亡くなり、眞光寺境内万日堂西北の木暮家墓地に葬られました。



【市指定史跡 木暮足翁の墓(眞光寺)】

木暮足翁の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1789	天明8 寛政元	1	渋川村南横町の本百姓で馬問屋を兼ねていた木暮与左衛門の長男として生まれる。諱を賢樹、幼名を谷五郎、通称は五十樹。はじめの号は梅屋。後に足翁と改める。
1796	寛政8	8	このころ、芝中の吉田芝溪・翠屏の兄弟に漢詩文を学ぶ。
1803	享和3	15	渋川の遍照寺住職となった周休から漢詩を学ぶ。 年代不明。江戸へ出て屋代弘賢の塾に入り国学と和歌を学ぶ。
1805	文化2	17	吉田芝溪に伴われ水戸藩に赴き藩主に調し和歌を数種供覧する。
1810	文化7	22	この頃、高崎藩士深井三右衛門の娘・か免と結婚する。か免との間には美津・秋太郎・新蔵・れんの二男二女が生まれる。
1811	文化8	23	5月、父の隠居により家督相続、与左衛門を襲名する。
1812	文化9	24	6月頃、父から相続した財産の全てを妹の婿養子幾太郎(後に与左衛門を襲名)に譲り渡す。隠居料としてか4反6畝6歩の耕地と屋敷並びに土蔵一軒を幾太郎から譲り渡される私塾を南横町に開き子弟の教育にあたり「横町の先生」と呼ばれた。この私塾から高橋蘭斎、堀口藍園、狩野利房などの教育者が育つ。
1829	文政12	41	愛妻・か免が子女を残して亡くなる。
1830	文政13	42	足翁の書による周休の漢詩集「竹溪小稿 初篇」発行。医師となることを志し紀伊国和歌山にあった華岡青洲の春林軒に入門する。 この頃、本居宣長の養子で和歌山に住居していた本居大平に国学と和歌を学ぶ。 年代不明。高野長英と交流を持ちオランダ医学と世界の状況を学ぶ。 医学を修めた後、渋川に戻り医者として開業する。
1849	嘉永2	61	日本で初めて種痘(天然痘の予防接種)が成功する。後に足翁も種痘を行っている。
1852	嘉永5	64	漢詩の師である周休が没する。
1853	嘉永6	65	浦賀にアメリカ合衆国のペリー提督率いる艦隊が来航する。 この頃、幕府役人に何回も開国を促す建白書を提出するも無視される。
1860	安政7 万延元	72	この年に多数の庚申塔が建立されるが能書家としても知られる足翁は近隣から記号を多数依頼される。
1861	文久元	73	元宿の吉田家の墓地に吉田芝溪と翠屏兄弟の顕彰碑を建てる(この年は吉田芝溪の没後50年にあたる)。顕彰碑は後に芝中に移設される。
1862	文久2	74	8/26 病にて没す。渋川の眞光寺墓地に葬られる。
1982	昭和57	—	5/15 没後120年。眞光寺墓地の「木暮足翁の墓」が旧渋川市の市指定史跡になる。

○年齢は数え年です。年代は前後することがあります

○主な参考・引用文献・・・『渋川市誌』、市指定史跡「木暮足翁の墓」説明文、品川鈴峰編『渋川の二大漢詩集 渋川の華』、『国史大事典』、大島史郎著『続ふるさと渋川史帖 眞光寺の歴史と文化財を中心に』

木暮足翁と渋川郷学

吉田芝溪・翠屏兄弟

木暮足翁の最初の師で「渋川郷学の祖」と呼ばれる吉田芝溪は、はじめ北牧宿の山崎石燕やまざきせきえんに学問の初歩を、後に昌平しやうへいこう聳さかの学頭を辞めた平沢旭山ひらさわあきざんに儒学・国学・詩文・農家経営・養蚕・産馬さんば・開墾などを学んだ人です。

天明7年(1787)に中之町で私塾を開き、寛政5年(1793)に開拓のため弟翠屏らと芝中(現在の御蔭地区)へ移住した後も、多くの門弟を教育しました。

実学的で実践を重んじ、郷土に根ざした学問を説く。著書に、実体験を基とした農業指導書である「開荒須知」や「養蚕須知」などがあります。文化8年(1811)に芝中で没しました。

吉田芝溪の弟・翠屏も、兄とともに学び、共に開墾し門弟の教育を行う人物でした。翠屏は兄・芝溪に先立つ文化2年(1805)に芝中で没しました。

足翁が吉田芝溪に入門したのは寛政8年(1796)8歳の頃なので、芝溪は芝中に移住した後だと考えられます。

足翁は、吉田芝溪の学問をよく受け継ぎ、渋川郷学の学統を次の世代に受け渡す中心的な人物と考えられます。

足翁は二人の師を顕彰するために、芝溪と翠屏のこと、吉田家のことを記した顕彰碑を文久元年に元宿の吉田家の墓地に建てました。この顕彰碑は、後に明保野の芝中公園に移されました。

また芝溪と翠屏の墓を、芝溪の家族が建てたものとは別に、芝溪と翠屏が住んでいた屋敷跡のわきに建てています。



【吉田芝溪顕彰碑(芝中公園)】



【吉田芝溪(左から2つ目)と翠屏の墓(右)】

遍照寺住職 周休

木暮足翁の漢詩の師で渋川の遍照寺住職の周休(竹溪は号 無学は字※)も渋川郷学に連なる人物として取り上げられています。

周休は、安永4年(1775)に持柏木村(現・渋川市赤城町持柏木)で農業を営む草葉氏の三男として生まれました。幼いときに身体が虚弱となり、天明5年(1785)11歳の時に同村の極楽院西善寺に入り、剃髪※して周弁和尚につき仏道・学問を修業しました。また吉田芝溪・翠屏兄弟にも主に文章学を学んでいます。

寛政7年(1795)、22歳の時に江戸へ出て東叡山※学寮に入り8年間仏教や経史を学び、そして佐々木琴台に漢詩を学びました。周休は自伝(遍照寺の竹溪寿塔銘文で原文は漢文)に「仏典の外に各方面の学問も勉強したが、最も漢詩に熱心で多く作った」と記しています。

享和3年(1803)に帰郷し、翌年の文化元年(1804)に30歳で遍照寺の住職となりました。足翁が周休に漢詩を学んだのは、このとき以降だと思われます。

周休の詠んだ漢詩には、足翁に関するものが沢山あり9月に足翁と四万温泉に行ったことを詠んだ『暮秋拉致木暮賢樹再遊四萬温泉』や、水沢寺に遊びに行く途中の景色を詠んだ『初冬拉木暮生及童頭遊水沢山寺』など、足翁と周休が一緒に出かけた際の漢詩がいくつも残っています。また周休は、足翁の妻が亡くなったときに『悼木暮内人』を、足翁が医師となることを志して旅立つ際には『送木暮生西上』を詠むなど足翁の人生の節目にも漢詩を詠んでおり、とても親密な交際があったことがうかがえます。また文政13年(1830)に刊行された周休の漢詩集『竹溪小稿上編』は足翁の書によるものです。

周休は天保13年(1842)に68歳で遍照寺を退隠して石原の石原寺に移った後、中村の延命寺に移り、嘉永5年(1852)2月4日に78歳で遷化しました。

周休の漢詩の弟子の中で渋川郷学に関連する人物としては、足翁ほかには高橋蘭斎や堀口藍園がいます。

※ 字 日本で、中国の風習にならって文人、学者などがつけた、実名以外の名(コトバンク『精選版日本国語大事典』「字」の解説より引用)

※東叡山 上野寛永寺のこと

※剃髪 特に仏門に入って髪を剃ること(コトバンク『精選版日本国語大事典』「剃髪」の解説より引用)

○主な参考・引用文献

『渋川市誌』 『品川鈴峰編 渋川の二大漢詩集 澁川の華』 『大島史郎・著 続ふるさと渋川史帖 眞光寺の歴史と文化財を中心に』 『郷土渋川第9号 木暮達二 (協力 平沢文夫) 関係資料から見た木暮足翁交遊録その1 師先輩』

醫師を志した木暮足翁

木暮足翁が41歳の文政12年(1829)2月26日、愛妻・か免※が35歳という若さで亡くなりました。足翁は自身に医学の心得がなかったことを憂い、医学の修得によって人を救うことを志します。翌年の文政13年(1830)、42歳になった足翁は、か免の一周忌を済ますと、名医として名高い紀伊国和歌山の華岡青洲の家塾・春林軒に入門しました。

☆医学の師「華岡青洲」

華岡青洲は紀伊国(現在の和歌山県)出身で、古医方とオランダ流外科を学んだ医師です。内科も外科もともに一致して生体の理を究めるべきであるとする「内外合一活物究理」を主張し、広く民間療法も採用して和漢蘭折衷の医療を実践しました。また、接骨医が使用していた麻酔剤を改良して経口麻酔剤「通仙散」を創案し、文化元年(1804)にこれを使用して全身麻酔下での乳がん摘出手術を、世界で初めて成功させた、当時最高の外科医でした。

青洲は足翁入門の5年後の天保6年(1835)に亡くなりました。梶谷光弘氏の論文「華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について(3)」で翻刻された『青洲華岡先生門人姓名録』には、次のとおり他の上野国(現在の群馬県)の門人とともに、通称の「木暮五十槻」で記載されています。

全身麻酔による外科手術は、限られた弟子にしか伝えられなかったもので、足翁には伝えられなかったと考えられますが、足翁は優れた技術を取得して渋川に帰郷し、医者として開業しました。

○梶谷光弘「華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について(3)」より抜粋

年	場所	氏名
安政三辰(年)十一月十二日	同駒形駅	内田春斎
同五年六月	同郡筑井村	斉藤平庵
嘉永四年十月	勢多郡駒形宿	内田忠順
同年	吾妻郡塚村	吉田忠徳
文政十三年月	群馬郡渋川	木暮五十槻
文政五年	勢多郡上増田村	岡田敬輔
文化七年	前橋駒形駅	内田忠助

上野

※か免 足翁の妻 高崎藩士 深井三右衛門の娘

○主な参考・引用文献 『大島史郎・著 続ふるさと渋川史帖 眞光寺の歴史と文化財を中心に』 / 『吉川弘文館 国史大事典』 / 『梶谷光弘・著 華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について(3) 日本医史学雑誌 第60巻第1号(2014)』

高橋蘭齋

寛政11年(1799年) - 明治15年(1882年)

高橋蘭齋は江戸時代の渋川村裏宿で、農業と馬問屋を営む高橋茂右衛門の次男として生まれました。幼名は角蔵、後に健治または健次郎。諱は勇魚。通称は茂右衛門。蘭齋・可度は号です。今日では渋川郷学の学統をつなぐ一人として位置づけられています。

蘭齋は、読み書きから和漢の史書を南横町(現・南町)の木暮足翁に、漢詩を遍照寺(並木町)住職の周休竹溪に学び、後に和歌と国学を一時期渋川に滞在していた近江(滋賀県)出身の和歌の大家・大寂庵立綱に学びました。

蘭齋は20代のうちに父・茂右衛門を亡くし、若くして家督を継ぎ茂右衛門を襲名しました。祖父・義右衛門、父・茂右衛門と同じく名主を務め、村の運営にリーダーシップを発揮し人々に賞賛されました。

天保年間(1831-1844)の初め頃に名主を辞めて医師を志し、江戸に出て当時最高の洋学者であった宇田川榕菴の弟子となり、3年間医学を学びました。天保5年(1834)頃には帰郷し医者として開業しました。蘭齋の新しい医術による治療は評判を呼び、治療を希望する人々が多数訪れました。

また、高い学識を評価され、請われて私塾を開き、こちらも評判を呼んで門弟の数は500人に上りました。門弟の中で一番の俊才が堀口藍園です。

蘭齋は書をよくし、慎重な筆法で楷書・行書とも得意で、和歌や漢詩を書いたものが市内各所に残されています。

明治15年(1882)、蘭齋は84年の生涯を閉じ遍照寺の墓地に葬られました。墓は渋川市の指定史跡となっています。藍園ら門弟の発起による顕彰碑「蘭齋高橋翁碑」が花缺地蔵(入沢)境内に現存します。



らんさいたかはしおうひ はなかけじぞうけいだい
【蘭齋高橋翁碑 花缺地蔵境内】

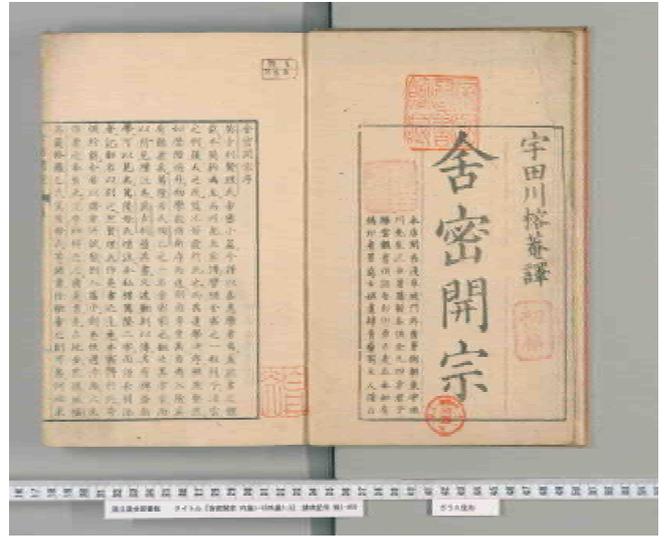
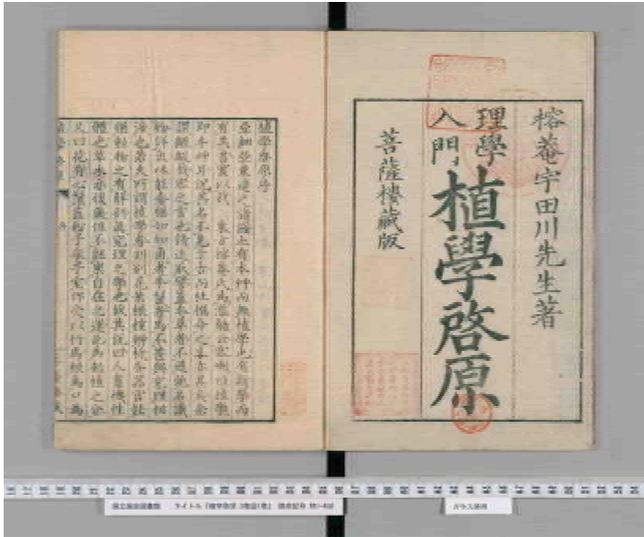
高橋蘭齋の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1799	寛政 11	1	農業のかたわら馬宿を営む高橋茂右衛門の二男として裏宿に生まれる
1806	文化 3	8	木暮足翁に弟子入りし読み書きから和歌を学ぶ
1812	文化 9	14	足翁妹・登茂の婿となっていた蘭齋の兄・幾太郎が足翁から家督を譲られる
1821	文政 4	23	渋川に訪れた近江国(現・滋賀県)出身の大寂庵立綱から和歌を学ぶ
1822	文政 5	24	名主だった祖父・義右衛門の代理を父・富太郎が務める
			このころ 祖父と父をあいっいで亡くし茂右衛門を襲名。若くして名主となる
1829	文政 12	31	堀口藍園(12歳)が蘭齋に弟子入りし読み書きの初歩から備学までを習う。藍園は人一倍の勉強家で蘭齋門下の俊才と言われた。蘭齋はこの頃には私塾を開いていたと思われる
1830	文政 13	32	足翁が医者となることを志し紀伊国和歌山にあった華園青洲の春林軒に入門する
			このころ 十数年務めた名主を辞め医師になることを志し江戸へ行く。有名な学者たちを訪問しその中から宇田川榕菴に弟子入りし医学を学ぶ
			この間、兄・与左衛門(幾太郎)の長男・道太郎を養子として家業をまかせていた模様
			3年間医学を学んだ後 渋川に帰り医者として開業する
1843	天保 14	45	医業開業願を岩倉代官所に提出する
1862	文久 2	64	足翁亡くなる。蘭齋は足翁をしのんで和歌を詠んだ「教え子と人のなげきの数々を負いて越ゆるん黄泉平坂」
1864	文久 4 元治元	66	足翁三回忌に和歌を詠む「巡りあえる三年の秋のけふの日は露にも法は忘れざりけり」
1868	慶応 4 明治元	70	足翁七回忌に和歌を詠む「七年の回りも梢も秋の色におもひ出にけり袖もしくれて」
1874	明治 7	76	足翁十三回忌に和歌を詠む「過いにしおもひ出て十餘り三年のけふに逢心地せり」
1882	明治 15	84	3月23日 高橋蘭齋亡くなり遍照寺墓地に葬られる
1885	明治 18	-	渋川八幡宮西の伊香保道三叉路に藍園ほか門弟等の発起により「蘭齋高橋翁碑」が建てられる。文章と文字は藍園の手による
1961	昭和 36	-	「蘭齋高橋翁碑」が渋川市渋川(入沢)の花缺地蔵の境内に移転される
1982	昭和 57	-	5月15日 遍照寺墓地にある高橋蘭齋の墓が渋川市の指定史跡となる

○年齢は数え年です ○年代は前後することがあります

○主な参考・引用文献 「渋川市誌第2巻」 「郷土渋川第12号」

高橋蘭齋の医学の師 宇田川榕菴



【写真 宇田川榕菴の著書『植学啓原』(左)と『舍密開宗』(右) 国立国会図書館デジタルコレクション】

医者を目指し江戸の町へ出た高橋蘭齋は、津山藩(現・岡山県北部)の江戸詰の藩医である宇田川榕菴※に弟子入りしました。榕菴の養父・宇田川玄真は江戸蘭学界のリーダー的存在で、才能を見込まれてその養子となった榕菴も「日本近代科学の生みの親」とよばれる大学者です。

当時の日本には薬になる植物を扱う「本草学」はありましたが、植物全てを研究するような学問はありませんでした。榕菴は西洋の「植物学」を、文政5年(1822)の『菩多尼訶経』や天保5年(1834)の『植学啓原』の出版をとおして日本に初めて紹介しました。現在でも使用される「花粉」や「繊維」などの用語は榕菴がオランダ語を翻訳したときに作った言葉です。

化学の分野では、「近代科学の父」と言われるフランス人ラヴォアジエの学説を紹介したオランダ語の書を翻訳し、『舍密開宗』※として天保8年(1837)から順次出版していきました。「酸素」「窒素」「炭素」「水素」などの元素名や「酸化」「還元」といった化学反応を表す言葉も、この時に榕菴が作った言葉です。

このような大学者・宇田川榕菴に学んだ蘭齋の医学は、非常に先進的なものだったと思われます。

※宇田川榕菴 寛政10年～弘化3年(1798-1846) 大垣藩(現・岐阜県大垣市周辺)の江戸の詰藩医であった江沢養樹の長男 名門・宇田川家の養子となり数々の研究・出版で日本近代科学の礎を築いた

※舍密開宗 「舍密」とはオランダ語で化学を意味する「chemie」(英語で言うところのchemistry)に当て字をしたもの 「舍密開宗」で化学入門の意味

○主な参考・引用文献 津山市洋学資料館ホームページ『洋学博覧漫筆』

蘭齋と合作掛け軸

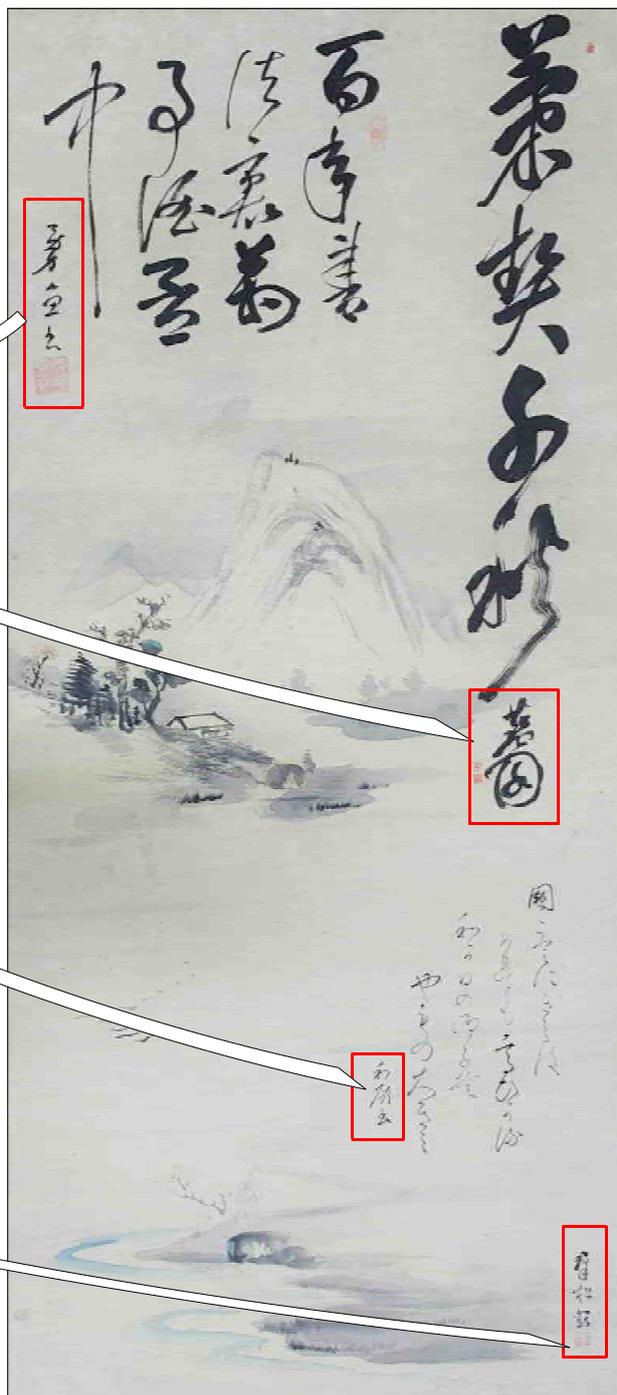
こちらの掛け軸は複数の人物が合作した作品です。おもに渋川郷学に関わる人物たちによって作成されたものと思われま

す。左上の書は、高橋蘭齋の諱（本来の名前）「勇魚」の署名から、蘭齋のものだと分かります。「百年書法裏万事酒客中」と書かれているよう

です。右端の書は、署名から堀口藍園のものと思われます。「菊契千形」と書かれているよう

です。下段にある書は、署名から狩野利房の手によるものだと分かります。書いてあるのは「国寒にきみは めれとも高ひかる 和か日の明る歟 やもの大きみ」と読む和歌ではないかと推測されま

す。最下段右の署名は、この絵を描いた人物のものだと思われ、「羣松」という名前であることまでしか分かりませんでした。「羣」は「群」の異体字です。中央に描かれているのは水沢山のように見えます。



合作掛け軸 『明治二年正月勇魚藍園利房羣松合作』明治2年 個人所蔵

書かれたのが明治2年(1869)なので、蘭齋が71歳、19歳年下の藍園が52歳、更に19歳年下の利房が33歳の時の作品です。このことから、渋川郷学に連なる人々が、年齢の差を超えた交流を持っていたことがうかがえます。

○主な参考文献 渋川市市誌編さん委員会(1993)『渋川市誌第2巻』渋川市/上毛新聞社編(1982)「群馬県人名大事典」上毛新聞社

蘭齋の和歌

高橋蘭齋は折に触れて和歌を詠む人物でした。こちらでは、文化財保護課所蔵『蘭齋高橋健治先生之著 和歌集 巻一・巻二』の写本から、交友関係にまつわる和歌を紹介します。

※「」の中が引用部分です。

※生涯学習課で独自にふりがなを振り、一部文字を改めました。

○木暮足翁が亡くなった時に詠んだ歌

「木暮老師の身まかりし時

教子とひとのなげきの数々を負てこゆらん黄泉の平坂」

○堀口藍園(張卿)から菊の和え物を贈られた際に詠んだ歌

「張卿ぬしの菊のあえものをたまわりて

色も香もたまわる事ぞ薄からぬ齡を延ぶときくのあえもの」

○堀口文平(藍園の息子)が岩鼻県から帰ってきた時に詠んだ歌

「堀口文平君の岩鼻県より帰御せられけるを

あまた魚底迄もなしに濁しけん君がこころの廣澤の池」

※岩鼻県 文平が勤めていた県 渋川村を含む上野国・武蔵国の幕府・旗本領等を統治するため慶応四年(1868)に設置された

○岩附屋婚姻のお祝いに詠んだ歌

「岩附屋の婚姻を祝いて

渋川に利根をむかへて岩附の尽きぬ齡を契りこそせめ」

○堀口吉右衛門の女の子のお祝いに詠んだ歌

「堀口吉右衛門ぬしの女子の祝いに

諸共に真かねのかたき契には幾世かきらぬ齡こめなん」

○狩野利房(嘉三郎)の結婚のお祝いに詠んだ歌

「湯上なる狩野嘉三郎ぬしの妻といし

若草の妻をむかえて御吉野に八千代春する契せよ君」

○黒船来航に関して

「夷国船のまた来るかとりどりのさわぎに

神風の舟くつ返す古も夢の上とはなりにける哉」

○安政5年(1858)に始まったコレラ流行について

「安政五年の秋冷徹あきこれら疫にて人あまた死なれたるをいたみて
白露を何かかなしとおもいけん人の命の消まさる秋」

○安政7年(1860)3月24日の桜田門外の変について

「大江戸桜田の騒ぎと聞て
雪なから弥生の三日をさくら田に敷ても花の名に匂うなり」

○文久元年(1861)2月に起きたロシア軍艦の対馬占領を聞いて

「対州(対馬)の魯西亞の夷人仇せしと聞て
えみしらが仇すを見つつ忍ぶにも対馬もおなじみくに皇国ならずや」

○慶応2年12月25日の孝明天皇崩御を同月29日の夜に伝え聞いて

「慶応二寅年冬師走の二十九日夜となん
今上皇帝陛下の神去り給えりと伝え聞侍りて
九重の霞は民の軒こめて大内山は春しらさらん」

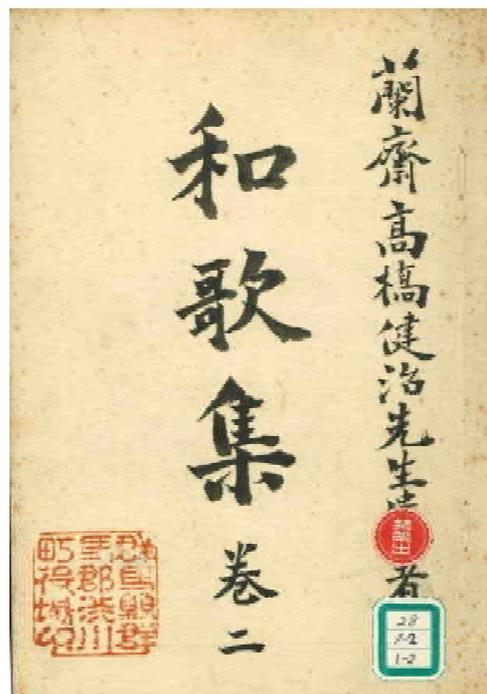
※大内山 皇居のこと

○明治6年(1873)の渋川小学校開校にあたって

「明治6年8月28日学校興立
今日よりは君々どちの案内にて学の道も広く開けん」

○主な参考・引用文献

高橋蘭齋(年代不明)『蘭齋高橋健治先生之著和歌集 卷一・卷二 写本』/渋川市市誌編さん委員会(1993)『渋川市誌第2巻』渋川市/高橋周楨(1893)『近世上毛偉人伝』成功堂



【写真『蘭齋高橋健治先生之著 和歌集 卷一・卷二』文化財保護課所蔵】

堀口藍園

ぶんせいがんねん 文政元年(1818年) - 明治24年(1891年)

藍園は、郷土の発展に尽力した教育者の一人で、吉田芝溪から続く渋川郷学を大成し、完成させた人と言われます。

藍園は、渋川村裏宿の紺屋(染物屋)堀口柳蔵の長子として文政元年(1818)に生まれ、同じ裏宿で家が近かった高橋蘭齋に漢学など初歩の学問を学び、木暮足翁には国学と和歌、周休には漢詩を学びました。また、吉田芝溪については藍園が生まれる7年程前に亡くなっており直接指導を受けてはいませんが、先師として尊敬していました。

紺屋のかたわら塾を開き、40歳で江戸・京都へ遊歴し多くの漢学者・漢詩人や勤王の志士らと交わり、帰郷後は塾の経営にも熱心に励みました。その後学制発布により一旦は閉じた私塾を明治10年に再開しました。教育者であり人格者でもあった藍園は人間平等を思惟し、差別する者を見れば憂えました。全ての人に学問を授け、人格を高められたらどんなに素晴らしいことかと考える藍園のもとへは県内各地から多くの門弟が集まり、門弟からは代議士・県会議員・郡長・町村長など多くの地方指導者が出たと言います。また、箕輪の牧野再龍と親しくなり、その弟子である大音龍太郎とも交流がありました。明治維新に際しては戊辰戦争三国峠戸倉の戦いに子の文平らを官軍側で参戦させたり、前橋藩主松平侯から上野総鎮撫使総長に任ぜられるなどした一方、群馬に逃れてきた彰義隊残党の助命を嘆願した話も伝わっています。

明治24年、74歳で生涯を閉じました。



【堀口藍園の写真 渋川市立渋川北小学校所蔵】

堀口藍園の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1818	文政元	1	藍園、裏宿に生まれる
1823	文政6	6	藍園、母イセを亡くす
1827	文政10	10	藍園、荷物を運ぶ馬の尻を棒でたたき馬が暴れるのを見て喜ぶような、気が荒く乱暴な子としてこの頃知られる
1829	文政12	12	藍園、高橋蘭齋に入門。人一倍の勉強家で蘭齋門下の俊才と言われる。後に木暮足翁と周休にも入門
1835	天保6	18	藍園、高崎藩士鎌原氏の娘ムラをめとる
1843	天保14	26	藍園、父柳蔵を亡くし、一家を支える立場となる
1845	弘化2	28	周休の「小鵲集」、藍園が全部校訂に関わって発行
1852	嘉永5	35	藍園、近隣の人々からの頼みを聞き入れ家塾を開く
1857	安政4	40	藍園、江戸に遊学。大沼枕山、小野湖山らと交わる。京都にも赴く
1868	明治元	51	藍園、岸重兵衛や羽鳥久右衛門とともに渋川村の主になる。子・文平、友人の後藤八郎右衛門、門弟の入沢啓助らにすすめ、戊辰戦争(三国峠戸倉での戦い)に参戦させる。彰義隊残党の助命に成功する。上野総鎮撫使総長に任命される
1869	明治2	52	藍園、村童教授に任命される
1871	明治4	54	芝溪60回忌にあたり有志らとともに吉田芝溪の墓への通しるべを建てる
1872	明治5	55	藍園、学制発布により家塾を閉じる
1873	明治6	56	学区取締役に任命される
1877	明治10	60	「私塾開業願」を楡取県令に出し、渋川村に藍園学舎を開く
1881	明治14	64	金蘭吟社第1回が上之町梅沢茶館で開かれる
1885	明治18	68	藍園ら高橋蘭齋門弟が蘭齋高橋翁碑を建立
1886	明治19	69	門弟らが藍園の詩をまとめた『藍園詩鈔』を刊行する
1891	明治24	74	藍園、没す
1893	明治26	—	門弟らにより「堀口藍園翁碑」が渋川八幡宮境内に建立される
1820	大正9	—	藍園の門弟である荒木真平が「堀口藍園伝」を発行
1924	大正13	—	藍園に従五位が贈られ、贈位碑が渋川八幡宮境内に建立される
1952	昭和27	—	藍園の墓、群馬県指定史跡に指定

○年齢は数え年です。年代は前後することがあります。またこの年表は、渋川市誌及び堀口藍園先生物語原稿(渋川北小所蔵)を参考に作成しました。

○引用及び参考文献

「渋川市誌第2巻通史編・上」/「まんが渋川の歴史」/「郷土渋川第9号」/渋川市ホームページ「旧渋川市地区の指定文化財」

寸暇を惜しんで学ぶ藍園^{らん えん}

仕事と勉強の両立を目指す

若くして父親の代わりに家族を養うことになった藍園は、それでも勉強を続けたい気持ちを諦められず、染物の仕事も勉強も両立しようと決心します。その一日は次のようなものでした。

店の職人たちより早く起き、はじめに仕事場をきちんと整理しました。

次に顔を洗い、職人を起こして朝食をとりました。

日中は、染物の仕事に精を出し、夜になると部屋に机を並べ、古い書物を学びました。

眠くなると墨をする暇さえ惜しんで古い帳面に字を習いました。

夜明けに一番鶏が鳴く頃、ようやく着物を着たまま眠り、また朝早く起きる・・・という毎日でした。

藍園と読書

藍園は、熱心に本を読み、読まなければならないと考えた本は、本にひもを通し、腰に縛りつけるほどでした。

また、染物をする時も、本を藍汁の入った瓶の蓋^{ふた}の上に置きながら読んだり、食事中、読書に夢中になり、ご飯の入っていない茶碗を箸でつついて、母親に笑いながら注意されたこともありました。

藍園は年老いてから、「世間の人には、本を読むと眠気を催すというが、自分は一度もそんなことはなかった。本を読んでいると、ますます興味がわいてきて眠気など起こらず、読書をやめたことはなかった。」と語っています。

結婚後の藍園

藍園のこうした勉強ぶりは、16、7歳の頃から一日も変わらず続けられたと言います。

年頃となった藍園は、母親の願いもあり結婚し、仲の良い家庭を築きながらも勉強をやめることはありませんでした。

藍園は、昼は仕事をし、夜になると、和歌をはじめ伝統的な日本の文学を木暮足翁^{こぐれそくおう}に、漢詩を周休竹溪^{しゅうきゅうちくけい}に学びました。疑問があれば、時には真冬の雪の中、真夜中でも教えを請いにきました。また、夜に詩を作り、それを弟子に持たせて周休に添削をしてもらうこともありました。

藍園は、このように時を無駄にすることなく、仕事と勉強を両立させたのでした。

実行を重んじた学問

藍園らんえんの学問

堀口藍園の学問は、広い意味で儒学に属しています。孔子や孟子を尊敬し、「論語、大学、中庸、孟子」といういわゆる四書や、「易経、書経、詩経、礼記、春秋」などの五経について学び、学んだことは必ず行うという実践を重んじました。そして曲がった学問や、世の中の俗悪にこびへつらうという態度を決して取ることはありませんでした。徳川幕府が政治を行うことに反対し、天皇が政治を行うのが正しいとする、尊王の考えを主張しました。頼三樹三郎らとともに尊王家として知られていた藤森大雅らと親しく交わったり、後に江戸に出て、大沼沈山、蒲生髻亭、小野湖山というような当時有名であった学者や詩人と交わり、詩や学問について話し合ったり研究したりしました。さらに、はるばる関西に出かけては、貫名海屋、橋本香坡というような名高い学者をたずね、その主張を聞いたり、学問や詩について議論したりして修養を積み重ねていきます。

藍園の正義感

藍園は、正義から外れた行いに対し、強く憤る心を持った人でした。しかし、正義から外れたことを改めるのに、自分から進んで熱狂的に革命したりしようという態度を取った人ではありません。すなわち、改革の機運が自然に高まってくるのを待つという、おだやかな革命家でした。これも生まれながらの性質もあったのでしょうか、染物に精をだし、家族を養わなければならないという境遇も手伝ったことと思われます。藍園は、自分の考えであった尊王の思想や精神を、自分の弟子たちなどに伝え、明治維新の味方を増やそうと考えていたようです。



【じっせんきゆうこう 渋川市立渋川北小学校にある「実践躬行」の石碑】

理想を求めて行動した人

藍園らんえんは、優れた教育者として多くの人々に慕われただけでなく、立派なおこないをする人格者として知られていました。普段は温厚篤実でありながらひとたび事が起きると勇猛果敢、己の信ずるところに向かって行動しました。

150名の命を救った行動

明治維新の際、彰義隊に加わり官軍に敗れた武士・白井幸助は150名程の部下を率いて逃れてきて、「自分は処刑を覚悟している。しかし、言われるままに行動したまでで何の罪もない部下達の命は助けてやってほしい。」と時の前橋藩主・松平直克まつだいらなおかつに部下の助命を嘆願しました。藩では、官軍の手前もあり、処刑した方が良いのか許した方が良いのか結論おおとりゅうたろうがなかなか出ませんでした。その様子を見た藍園は、当時新政府で高い地位についていた大音龍太郎おおとりのりゅうたろうを訪ね、「刑を受けることを覚悟して降伏してくる者に罪はない。これを殺してしまうことは人としての道に外れるものである。『窮鳥懐きゆうちようぶところに入れば獵師はいりようしも殺さず』と言う。官軍の要職にいて事を処理するあなたが、これに劣る事をするとは考えられない。慈しみを求め慈しみをすることは誠に快いことだ。」と理をもって説き、情を込めて話しました。龍太郎は大いに感動し、これらの人々を助けることを約束しました。藍園は藩主・松平直克にも同じように心を込めて話し、直克もまた深く感激して罪を許すことを決意し、白井幸助以下全員の命は救われました。

なお、藍園と龍太郎は以前から親交があり、のちの西南戦争の際には、西郷隆盛の味方をして東京を追われた龍太郎を藍園がかくまったと伝えられます。

人々の幸せを願い、学問を授ける

藍園は、世間の人々が衣食足りて喜びがあふれることをいつも願っていました。明治4年に公布された解放令によって法的には身分制度はなくなったものの、藍園が生きた明治の世は、江戸時代の封建的な考え方が強く残っていましたが、このような社会の中で藍園は人間平等の考えを持ち、人を差別することなく差別する者を見れば憂えました。とりわけ教育者でもあった藍園は、「分け隔てなく学問を授け、人格を高めさせるようにしたならばどんなに素晴らしいことか。」と考えました。ある青年は、昼間は一所懸命家の仕事に精を出し、深夜になると書物を抱えて藍園を訪ね指導を受けました。それは何年にもわたり、藍園は青年の姿に自分の若き日々を重ねてか、青年の将来を楽しみにしていたと言います。藍園は、また、門弟一人一人の資質や境遇に合わせ、気鋭で攻撃的な塾生には穏健な篤行人の伝記を、消極的な塾生には進取の氣象である人物の伝記を読ませるといように個に応じた教育を行いました。学校のない時代に藍園の塾には県内各地から大勢が集まり、門弟からは代議士、町村長、議員、銀行頭取など多くの人材が出て新時代建設に活躍し、群馬県初代県令かとりもとひことなった楫取素彦をして「今や群馬県の政治は藍園翁の門弟らの手で行われている。」と言わしめました。

※ 「進取の氣象」進取=みずから進んで事をなすこと、氣象=気性に同じ（広辞苑）

書道家としての藍園^{らんえん}

藍園は、詩人や教育家として有名でしたが、書道家としても優れた人物でした。ここでは、藍園の書道家としての一面を紹介します。

藍園は書道家として、草書を最も得意とし、そのすばらしさは県外を含め世間の人に知れ渡っていたと言います。その書も人々に大切にされ、次のような話があります。

・町の人々は、家を建てると藍園の書を座敷などに飾ることを誇りとして、藍園の書がないと大変悲しんだ。

・人々が藍園について噂をする時は、まず藍園の書について話し、その後、染物屋の主人として…といった順番で話した。

それでは、藍園はどのように優れた書道家となったのでしょうか。

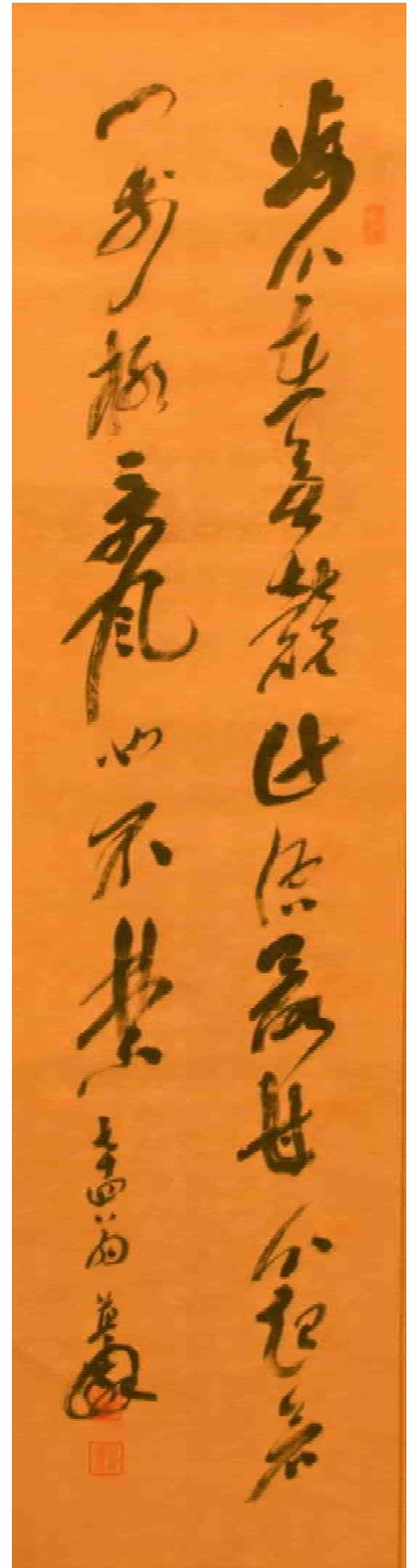
一つに、暑い夏でも、寒い冬でも、寝る時間も惜しんで、一年中変わることなく真剣に練習を積み重ねたことです。糸を染める時は作業に使う棒を、火鉢の灰をかき回す時は火箸を、人と話し合っている時は指を使って、どのような時でも字を習っていました。

もう一つは、藍園の人柄にあったと考えられます。書はその人の品格を表すものと考えた藍園は、上達してもまだまだ自分の書は未熟であると考え、いっそう励むという謙虚な心を持っていました。

上毛の三筆といわれた書道家の角田無^{つのだむ}幻^{げん}の書を手本とし、人々からは自身の書を褒めたたえられましたが、「自分はまだまだ未熟である」と周囲の人々に話したといいます。

このように、たゆまぬ努力と謙虚な心をもって書に取り組むことで優れた書道家になったと言えます。

安心在無競此語最甘心起看
門前柳受風如不禁
七十四翁 藍園



【藍園の書(掛け軸) 石坂家所蔵】

染物屋の主人としての藍園

仕事を大切にした藍園

藍園は、教育家、書道家、詩人として優れていましたが、家業である染物の仕事を大切に、まず仕事に精を出し、余力があれば勉学や詩作、書道に励むというやり方を実践しました。

誠実な仕事ぶりで繁盛

藍園の家業の染物屋は屋号を「菜田屋」といい、創業は元禄時代頃に遡ると言います。

店には、たくさんの染物が積んであり、藍園は店奥の座敷にあるいろいろのそばに座って、働いている職人の様子を見たり、お客さんの応対をしていました。もっともこれは藍園が50歳を過ぎてからのことで、それ以前は自ら染物を行いながら、お客さんが見えると急いでお客さんの前に行き、丁寧に挨拶し、親身になって応対しました。

染物屋（紺屋）の仕事は、「紺屋の明後日」(※)といわれるほど、約束より遅れることが普通で、世間の人々もそのように思っていました。菜田屋ではそのようなことはなく約束をきちんと守りました。

また、安い値段で注文を引き受けた時も、染物の仕上がりが悪ければ、職人にやり直しを命じ、しっかりしたものを渡したと言います。

このような誠実な仕事ぶりで、来客や注文が多く、店先には染物がうずたかく積み、多くの職人が昼夜一生懸命仕事をして、間に合わなかったと言います。

同業者の中には、客が少なくなり、転業しようとする者、菜田屋のまねをする者や値段を下げて対抗しようとする者が現れました。当の藍園はそのようなことは気にかけず、先祖からの「信用、誠実な仕事」を守り、仕事に当たりました。

このような仕事ぶりから、菜田屋は繁盛し、「染物といえば菜田屋、菜田屋といえば染物」と言われるほど有名であったと言います。



※紺屋の明後日：約束の期限が当てにならないことのとえ。紺屋(染物屋)の仕事は、天候に左右されるため遅れがちで、仕上がりの期限をいつも「明後日」と言い訳していたことが由来。

藍園と漢詩

藍園は、人格形成には学問・徳行・芸術・家業どれも重要なものと考え、生活基盤である家業に精励し工夫改善して能率を上げることを説き、知情意の調和的発達を目指しました。書・画・漢詩・和歌などの芸術を身につけることにより、豊かであるおいある人格形成がなされることを願っていました。

藍園自身も漢詩を周休に学び、秀でた詩人として名を知られました。生涯にわたり詩をつくることを人生の楽しみとし、家業の染め物の仕事で疲れていても夜更けまで詩想を練ったと言います。

藍園詩鈔について

「千首を下らず」と言われる程多くの詩をつくった藍園ですが、自分からすすんで詩を公表し名声を求めるようなことはしませんでした。弟子達は「このままでは先生が詩を書いた紙が散逸してしまふ。それは詩界や文壇のためにも誠に惜しい。」と考え、お金を出し合って詩集の発行準備をし、藍園に発行許可を願い出ました。藍園は、「私の詩集を出すことは自分の気持ちに反する。自分が作った詩はまだ未熟で恥を世にさらすことはしのびがたい。むしろ紙片はねずみなどにかじられた方がましだ。」と言って断りましたが、弟子達が何度も熱心にお願ひした結果、やっと許しをもらい、序文には藍園の知人で有名な詩人や学者達(明治の三詩人に数えられた小野湖山や大沼沈山、初代群馬県令の楫取素彦、法制学者で多くの法律起草に関わった細川潤次郎等)に寄稿を依頼し、明治18年、「藍園詩鈔」が発行されました。

後年、昭和56年に「藍園詩鈔訳註」を刊行した岸八一氏(金井)は、「詩鈔全文を写しているうちに、藍園先生の人格が心にうつり、涙の出るほどの感激を覚えた。偉大な郷土の生んだ大先生を心ある方に知っていただきたい。」と記しました。また、岸氏の著書を活字・復刻化し、平成20年に「澁川の華」を刊行した絵と本の木かげ館館長の品川秀男氏(金井)は、同書の中で、「(藍園は、)先生として深く信頼され尊敬されたので、おのずと彼の詩にも『清く正しく』という傾向が強くなったのだと思う。その結果世間の腐敗や政治の乱れに強い批判を加える詩が多くなったのだろう。一方、自分の教え子や地域の人に対しては、温かい気持ちを忘れずに、そういう人々を応援する詩が多い。」と藍園の詩への感想を述べています。

藍園詩鈔は、藍園が詠んだ漢詩のうち319編を選び、上中下3巻にして刊行されました。原文は全て漢字で書かれています。

卷之上…自身の境遇や立場などを折り込んだ人生観や、英仏や会津城などの幕末における情況、人々を苦しめた長雨や麻疹、明治3年に起きた平沢川洪水、都丸梁香、大音龍太郎らとの交友関係等

卷之中…吉田芝溪の師であった平沢旭山の墓参り(東京深川)や小田原、久能山、桑名、木曾山中などへの旅、木暮足翁、楫取素彦、狩野利房らとの交友関係等

卷之下…箱根、浜松、伊賀山中などへの旅、周休、細川潤次郎、松本凌波らとの交友関係等

藍園の詩から

藍園の詩には、藍園の生き方や人生そのものが表されています。決しておごりたかぶらず努力を続ける人であった藍園。その人物像が次の詩からも読み取れます。

『藍園詩鈔』卷之上より

今茲丁卯賤齡五十偶得長律

この明治三年自分も五十になって
思いがけなく七言の詩ができた

得失悲歡五十春

得たり失つたり悲しんだりしながら
五十の春を迎えた

難逢世運與時新

二度と会うことのできない世に生まれて時を過ごしたが
世の成り行きは月日の流れと共に新しくなっていく

未能免俗愧高士

この年になってまだ俗物であり
自分は徳の高い人を見て恥じ入るのであり

有不慊心思哲人

自分の心の中にあきたらない事が多く
もつと賢明な人たちに学ばねばならぬと思っている

濃淡霞消山歴々

外を眺めると今、濃淡の霞が消え去って
山がはつきりと美しく姿を見せており

浅深氷解水粼々

浅深に張った氷もとけて
水が増し石に激して流れている

更驚乾雪點雙鬢

さらに驚くことは乾いた雪が飛んできて
左右の鬢の毛についた

阿母老孱年七旬

私の母も年をとって弱く
もう七十になったことである

藍園らんえんと弟子たち

藍園の教え

藍園が弟子たちに特に奨励したことは、「人柄が実直、素朴で、思いやりの深い行いをする」と「常に道理にかなった言動をとること」でした。そのため、ぜいたくや投げやり、怠けの心、権力に頼るといったことなどを強く戒めました。しかし、その教え方は、ただ叱ったり、言葉で教えるのではなく、藍園自身が実行し、次第に感化していくというやり方でした。

昼は仕事に励み、夜は遅くまで書物を読み勉強に努める藍園の姿を見て、教えを願う者は増えていき、ついには、県内各地から弟子入りする者も出てきました。一時は、数十人が藍園の家に寄宿して勉強したと言います。

藍園塾の様子

藍園は、弟子が増えても、家業をやめて、教育だけに取り組むというやり方はしませんでした。弟子が少ない頃は、仕事場にむしろを敷き、その上に弟子たちを座らせ、自分は染物の仕事をしながら教えていました。弟子たちは足が痛く、渋い顔をして本を読んだと言われます。弟子たちは、このように本を習い、それが終わると字を練習しました。藍園は、夜になると弟子たちが書いたものを直し、翌日、返しながらその出来のよしあしについて説明しました。弟子の数が増え、こうしたやり方が難しくなると、弟子の中で優秀な年長者を選び、塾頭とその補助者として、年少の者の指導に当たらせました。午前中は読書を中心として、午後は字を習わせたり、詩を作らせたりしました。藍園自らは、明るいうちは、仕事に精を出し、夜になると部屋の中央に机を据え、弟子たちを円形に座らせ、四書五経、十八史略、国史略、史記といった書物の講義をし、指導に当たりました。

藍園と弟子

藍園塾で指導を受けた弟子たちの数は、千人を超すといわれています。これらの弟子たちの中から、後に県議会議員や町村長といった地方政治の要職で活躍した人々が多く輩出されました。このような人たちは、藍園の教えにより、おごらず、質素儉約を誇りとし、道理にかなったことをつくすことに喜びを見出したと言います。藍園もまた、そうした弟子たちの正しい行いを見聞きするにつけ、我がことのように喜び、自分にとっても榮譽と考え、自分のことよりも弟子たちの名声が一層高まることを願ったと言います。

このような様子を見て、世の中の人たちは、かえって藍園を褒めたたえたため、藍園の名声はますます高まったと言います。

渋川郷学 5人の師匠たち ～ゆかりの地めぐり～

1 山崎石燕墓所

雙林寺(中郷地内)

山崎石燕は北牧宿(現渋川市北牧)に生まれ、幼い頃から学問を好み、下仁田村の高橋道齋に国学を、江戸に出て井上金峨に儒学を学びました。帰郷して塾を開き、基礎的な学問を教えるなど子弟の育成に尽力しました。この中には吉田芝溪・翠屏兄弟もおり、芝溪のその後の学問の歩みに影響を与えました。

天明5年に77歳の生涯を閉じた石燕の葬儀は、芝溪ら門弟により盛大に行われ、墓は中郷にある禅寺・雙林寺本堂裏の墓地に建てられ、現在は市指定史跡となっています。



雙林寺 …… 山号は最大山、院号は春日院。関東管領上杉氏の家宰である長尾景仲(昌賢、1388～1463)が宝徳2年(1450※)に山城国の月江正文禪師を開山として創建したといわれる曹洞宗の寺院。寺格は一等で、創立当時は僧侶は常に200人を下らなかったと伝わります。現在の諸堂は元禄年間(1688～1704)に再建されたものですが、昔時の面影を残しています。月江正文にちなむ大カヤを含む「七不思議」が知られています。 ※文安4年(1447年)の創建とも

2 吉田芝溪・翠屏兄弟の墓所へ導く道しるべ 御蔭地内

市内には渋川郷学の師匠の遺徳を偲んで弟子たちが建てた顕彰碑や筆子塚などが現在も数多く残り、渋川郷学の師弟関係の深さを今に伝えていています。藍園も師の顕彰碑を建てたり、師の位牌を毎年の盆時期や命日に祀ったりして、尊敬や感謝の気持ちを表したと言います。藍園は直接指導を受けていませんが、吉田芝溪と翠屏(芝溪の弟：子登)を先師として尊敬し、その功績が人々から忘れられることを心配し、芝溪60回忌にあたる明治4年(1871)に、有志らとともに芝溪と翠屏の墓所近くの道に石の道しるべを建てました。



道しるべには次のように刻まれています。

漫遊文章所載
吉田子正・子登両先生墓
自是南在 百有餘歩之外

平沢旭山の書いた漫遊文章という書に出てくる、
吉田芝溪・翠屏両先生のお墓は、
これより南、百有餘歩のところにある

さらに、藍園は、芝溪の師である平沢旭山の墓が東京・深川の靈巖寺にあったので、東京に出ると必ずその墓へお参りに行ったと伝わります。

平沢旭山(1733-1791) 享保18年(1733)、宇治(京都)生まれ。寛政3年(1791)没。享年59
江戸昌平黌で学頭をつとめた。天明5年(1785)に渋川へ遊び、吉田芝溪に乞われて同家に3年余り滞在。
芝溪・翠屏兄弟などを門弟として儒学、国学、詩文などを教授したという。

3 吉田芝溪・翠屏の墓

御蔭地内

吉田芝溪の墓は御蔭に2か所あります。

1か所は道しるべから南に140m程入ったところで、『群馬県指定史跡 吉田芝溪の墓』標識と説明板があります(県指定史跡 昭和26年6月19日指定)。『石像物と文化財』によると、芝溪の墓は正面に「子正吉田先生墓」、裏に「文化八年辛未弟六月十九日」と刻まれており、南隣にある弟・翠屏の墓は、横書きに「翠屏田先生墓」、その下に漢文で略歴が刻まれ末尾に「木暮足翁首再拝謹撰并書」とあるので芝溪・翠屏の門弟である木暮足翁が撰文し書いたと分かり、おそらく芝溪の墓も翠屏の墓も足翁が中心になって建てたものであろうとしています。

この墓所から東約170m程のところ、もう一つの芝溪の墓があり、こちらにも『群馬県指定史跡 吉田芝溪の墓』標識があります。芝溪の墓には芝溪の戒名「傑叟俊英居士」と、裏面に「文化八年未六月十九日」と没年が刻まれており、同墓所には芝溪の祖父母、父母、妻らの戒名と没年月日が大きな一石に彫られたものと、他に養子の大二郎や夭折した一族の子どもの墓が二基あり、弟・翠屏の墓はないとのこと。



道しるべから140m程南にある墓所。芝溪の屋敷跡のわきに建てられた。

写真左 県指定史跡の標識と説明板
中央 芝溪の墓
右 翠屏の墓

上記の場所から170m程東にある墓所。
こちらの墓は家族が建てたものと伝わる。



4 吉田芝溪顕彰碑

御蔭地内



吉田芝溪の子弟で、医者として開業する傍ら私塾を開き門弟を教育した木暮足翁は、吉田芝溪・翠屏兄弟を顕彰するため、芝溪と翠屏のこと、そして吉田家のことを記した顕彰碑を文久元年に元宿の吉田家の墓地に建てました。

この顕彰碑はのちに明保野の芝中公園に移されました。現在も芝中公園の中にあります。

5 極楽院 西善寺

赤城町持柏木地内

天明5年(1785)、周休竹溪が11歳のとき、てい髪して西善寺周弁和尚のもとで仏道・学問を修業しました。周休という名は、師である周弁の一字をもらったものです。

建物はありませんが、敷地には庚申塔や道祖神等の石像物が多く残っています。



6 光明山 常楽院 遍照寺

並木町地内



寺所蔵の文書によると、慶安3年(1650)、存覚法印により創建されました。眞光寺の寺域につくられ、境内・檀家とも眞光寺から分けられました。

寛延期(1748~1751)に本堂・庫裏を焼失、その後再建。周休の代に再び全焼し、再々建されました。本堂は文化12年(1815)の再々建当時のまま現存しています。庫裏や門は昭和63年に建て替えられました。眞光寺の末寺です。

文化元年(1804)、周休は、30歳で遍照寺第12世住職となり、68歳まで同住職をつとめました。周休の代に再々建された本堂の向拝部には高橋蘭斎揮毫による扁額があげられており、本堂の前には周休が自身で建てた寿塔(生前に建てた塔)が残っています。また、お寺の東南側にある墓地には、市指定史跡(昭和57年5月15日指定)となっている「高橋蘭斎の墓」があります。



本堂と向拝部に掲げられた扁額



周休塔(寿塔)側面
「無學道人傳 道人名周休・・・」



高橋蘭斎の墓

7 光徳山 孝顕院 石原寺

石原地内



創建年代不明ですが、寛文3年(1663年)の「西上州群馬郡石原村免田畠水帳」に「諏訪免・寺免(石源寺)」(※源は原文のまま)と書かれているので、1663年以前に存在していたと考えられます。明治8年には石原学校が置かれました。渋川高崎線道路拡幅工事、中村上郷線道路拡幅工事のため度々移転し、現在地へ。眞光寺の門徒寺です。

天保13年(1842年)、周休68歳のとき、遍照寺を退隠し石原村の石原寺住職となりました(2年間)。

8 早尾山 薬王院 延命寺

中村地内



開創は元禄年間(1688年～1704年)、光元法印の開山によるものと考えられますが、開山の地は渋川市の西、五輪平(延命寺平付近)であったと伝えられます。天明3年(1783年)の浅間山の大噴火で伽藍を被災。旧利根川縁(延命寺滝付近：現在の北橋町八崎)への移転後まもなく、利根川の氾濫で流され、現在地へ移りました。現在の伽藍は昭和45年に新築。眞光寺の末寺です。

弘化元年(1844)、周休70歳で中村の延命寺住職となりました(10年間)。
嘉永7年(1854)2月4日、80歳で遷化し、遺骸は遍照寺へ。

9 威徳山 無量寿院 眞光寺

並木町地内

天台宗の関東五ヶ寺の一つ。正式には、「天台宗威徳山無量寿院眞光寺」と言い、比叡山延暦寺の直末寺です。開祖は叡海、創建年月日は不詳とされますが、叡海が開設した渋川談義所について、「明德五年(1394)、渋川談義所において貞海、慶舜、興海などによって『法華玄義』の書写がなされる」と記述された資料があることから明德年間(1390～1394)には存在していたと考えられます。市指定史跡「木暮足翁の墓」の他、県指定重要文化財「眞光寺洪鐘」、市指定史跡「壺銭職の聖徳太子塔」、市指定重要文化財「眞光寺万日堂」等多くの史跡や文化財があります。



眞光寺本堂

周休は眞光寺42世順海(寛政元年(1789)6月入寺－寛政8年(1796)7月13日逝去)に学んだとされ、周休が天明7年(1787)から入って8年間仏教学を学んだ「檀林郷校」は眞光寺のことと考えられます。



文久2年(1862)に亡くなった木暮足翁は、眞光寺境内万日堂北西の木暮家墓地に葬られました。お墓は、大きな自然石を二重に積み、その上に桐と橘を刻む切石の台石を重ねた上に、「木暮賢樹奥墓」と記されている自然石が積まれた、総高約2m程ある墓石です。没後120年の昭和57年(1982)5月15日に、旧渋川市の市指定史跡となりました。

10 蘭齋高橋翁碑

はなかけ
花欵地蔵境内(入沢地内)

明治18年(1885)、堀口藍園など高橋蘭齋門弟等の発起により、伊香保道三叉路に建てられました(のちに入沢の花欵地蔵の境内に移されました)。碑の文章と文字は堀口藍園の手によるものです。



11 石碑「しぶかわ」

渋川駅前広場

渋川駅前広場の北西隅に建てられている「しぶかわ」の石碑を御覧になったことがあるでしょうか。昭和45年8月に渋川駅前に建立され、その後2回の移設を経て、現在に至っています。石碑には次のように刻まれています。

この地の人
せまい所では
人に先を譲る
しかし 大道では
決して
人後に落ちることを
欲しない
ある時代の この国の良さを
渋川の人が 受け継いでいるのは
郷儒堀口藍園翁の感化に
よる所が 大きいと
思われる



12 受け継がれる「渋川郷学の精神」

渋川北小学校、渋川北中学校



藍園像（渋川北小学校）

小学校4年生の社会科副読本「新しい渋川」では、「きょう土の先人たち」「地いきの発てんにつくした人びと」の一人として、藍園が紹介されています。

渋川郷学の教育は、進んで新しい学問知識に取り組み、現実の生活や社会に役立つことを重んじました。

渋川北小学校と渋川北中学校では、現在もその校風や教育理念に「渋川郷学の精神」が受け継がれています。渋川北小学校玄関には堀口藍園像や写真とともに渋川郷学の説明文が掲げられ、敷地内には渋川郷学の教えである「知行合一」「実践躬行」「師弟同行」の石碑が建立されています。また、渋川北中学校ホームページでは、学校の概要を紹介する文章中で「渋川郷学」にふれ、「この地域には江戸時代から明治にかけて渋川郷学といわれる庶民の学問が発展し、多くの優れた人材を育成した歴史がある。そのためか、(略)教育への関心は非常に高いものがある。」と結んでいます。

渋川北小学校敷地内に建てられている3つの石碑



ち こうごういつ
知行合一



じつせんきゅうこう
実践躬行



し ていどうぎよう
師弟同行

◎澁川北小学校玄関に掲げられている「澁川郷学」説明文より

「澁川郷学とは」

江戸時代の末期（安永ごろ）から明治中期にかけて澁川には、師弟関係で結ばれた一連の学者・教育者がいた。吉田芝溪、吉田翠屏、小野里巴水、木暮足翁、僧周休、高橋蘭斎、狩野利房、堀口藍園の諸先生がそれである。これらの先生はいずれも庶民といわれる階層の出身で、「自力で」「自宅に」「自分の教育方針で」私塾を経営し多くの人材を育てた。澁川におけるこれらの一連の学風・教育理念を澁川郷学(しぶかわきょうがく)と呼んでいる。

澁川郷学の主な特色としては次のような事項があげられる。

- ①知行合一を根本に置き、実学的で実践を重んじた。
- ②実践躬行の立場で、郷土の開発、地区の行政、風俗習慣の善導を説き、指導にあたった。
- ③師弟同行の姿勢で学問、教育業務等にあたった。
- ④進取の気象に富み、儒学のほか国学、歌学、蘭学、洋学、農学なども取り入れた。
- ⑤尊王開国論を奉じ建白書をその筋に献じたり勤王活動に取り組んだりした。
- ⑥師の顕章に熱心であり、墓碑をたてたり、著書を刊行したりした。

なぜ、この地にこのすばらしい学問と教育実践、そして行動実践があったのだろうか。気候風土上の条件は決して恵まれていたとは考えられない。三国からの空っ風、榛名赤城の雷、軽石混じりの土壌、利根川や吾妻川の洪水による氾濫など常に自然との苦闘が続いていた土地柄でもあったからである。また、城下町や大名領でもないので規範に則った統制の取れた政治がなされず、宿場町・市場町として現金収入があったり、賑やかな温泉町に近いということでも遊ば場も多かったりして、その日その日をその時々に合わせて過ごせばいいという風潮がまかり通る町でもあった。人々の心に潤いと情緒などは育まれず、文化的な伝統はたいへん貧弱なものであった。だからこそ、心ある先人達はこれを憂え、実学を重んじ、澁川の復興に努めるために、澁川郷学を打ち立てたのではないかと考える。そして、多くの立派な人材を輩出し、その弟子達が師の考えをさらに伝え、自らの仕事に精を出しながら後輩達の指導にあたることにより「澁川に学を為す集団あり」といわれるまでに成長し、所期の目的を達し、今日に至っているのである。

本校の校庭の一角に「知行合一」（昭和54年職員一同）や「実践躬行」（昭和59年職員一同）そして「師弟同行」（平成6年建立）の石碑が建てられている。

また、研究紀要(昭和50年)には「この地には、吉田芝溪先生以来輝かしい伝統の澁川郷学がある。大道をふまえて、徒に理に走らず、実につき、額に汗して、師弟相共に学び行う。これは未長く伝えなければならない」とある。このように本校の教職員は、田部井鹿蔵校長をはじめ伝統的に澁川郷学の精神を受け継いで、真摯に教育実践に努めてきた経緯がある。

◎田部井鹿蔵校長とは

「澁川郷学」という言葉は、戦前に澁川小学校長をした田部井鹿蔵氏(1880-1955)がその著述の中で述べたもので、澁川市誌での説明においては、「(田部井氏は)おそらく郷土に根ざした特色ある教育と学問という意味から『郷学』ということばを使ったのであろう。」としています。鹿蔵は館林市に生まれ、大正7年(1918)に澁川小学校長に就任し、澁川郷学の研究を行いました。



澁川北小学校校庭にある
田部井鹿蔵校長の胸像

※「澁川小学校」は、明治6年8月、当時第十八学区取締であった藍園が区長、副区長と連署し、県令に設立願いを提出し同年8月28日に設立されました。学校は元宿（現在の元町）にある林徳寺が建てられました。その後校名変更等様々な変遷を経て明治43年に現在地へ校舎竣工、昭和29年の町村合併で澁川市となり南小学校が分離新設され「澁川市立北小学校」に、平成18年の市町村合併で新澁川市となった際に現在の「澁川市立澁川北小学校」に校名を変更しています。

13 堀口藍園印章・藍園詩鈔版木

澁川市立図書館所蔵

市指定重要文化財 昭和62年2月27日指定

印章は97個あり、子や孫の印章も含まれます。印材は石が最も多く、木や銅・水晶などもあります。「藍園詩鈔」の版木は39枚あり桜材でできています。門弟らが明治18年(1885)、藍園の漢詩のうち319編を選び、上中下3巻として刊行した詩鈔の版木です。



堀口藍園印章



藍園詩鈔版木



これらを所蔵している図書館の玄関外、すぐ北側に標識と説明板が建てられています

14 堀口藍園生誕の地

裏宿地内



裏宿信号のすぐ近く

生家跡に、「生誕の地」と書かれた看板が建てられています。藍園は澁川宿の紺屋・堀口柳蔵の長男として生まれました。家は代々紺屋(染物屋)を営み、藍園は家業のかたわら学業を教えていました。



15 金欄橋

平沢川(裏宿と上郷の間)に架かる橋

「らん」の漢字は異なっていますが、この橋名について、「澁川市の地名」では、「澁川郷学者堀口藍園ゆかりの金蘭吟社きんらんぎんしゃから名付けられたのか、藍園墓地に行くにはこの橋を渡った。」とあります。金蘭吟社は藍園門下の、兄弟のように厚い交友関係で結ばれた懇親と意見交換の会として設けられていました。



現在の橋は昭和54年3月完成。昔は土橋だったそうです

16 のぼりわく 幟 杵、幟 杵の道

上郷地内

渋川八幡宮の祭礼時には、堀口藍園書^{はちまんおおかみ}の八幡大神の幟を石柱の幟杵に上郷の人総出で立てたと伝えられます。また、幟杵の前の南北に走る道のことを「幟杵の道」と呼んでおり、かつては幟杵の道を境に、西側が天領、東側が真光寺領とされていました。

写真左 藍園墓地東側。道の入口
右 道沿いに残る一対の幟杵



17 藍園墓地の大ケヤキ

上郷地内

県指定天然記念物 昭和27年11月11日指定



ここに藍園のお墓があるため、森をなしていた頃は、「藍園の森」とも呼ばれていたそうです。

藍園の墓の傍らにあるため、「藍園墓地の大ケヤキ」と称されます。樹齢は約600年と言われ、かつては樹齢200年以上の杉数本とともに森をなしていました。昭和34年(1959)の伊勢湾台風の時に杉は倒れ、この大ケヤキだけが残りました。根元周りは14m、目通り周8.7m、樹高11m、枝張りは東西12m、南北14m。昭和38年までは樹高が27mありましたが、幹の空洞化が進んだため、主幹の地上9mを残して伐採されました。幹を治療して樹勢を保っています。

18 堀口藍園の墓

上郷地内

県指定史跡 昭和27年11月11日指定

藍園墓地は平沢川の南、上郷の岡の一角にあり、藍園の墓は大ケヤキの西約10mのところ、西向きに建てられています。正面には「堀口藍園之墓」と刻字され、側面及び裏面には生年月日や没年月日・享年とともに、「名は貞歙^{さだはる}、字は張卿^{ちやうけい}、五郎兵衛と称し、藍園は号である」こと、父柳蔵や亡母、高橋蘭齋と木暮足翁^{おくりな}という師の名、藍園の人となり、諡^{おくりな}などが刻まれています。

写真右はお墓の裏面



19 祭龍祠

大山祇神社（石原地内）

慶応4年(1868)6月17日に岩鼻県が設置され、藍園と親交があった大音龍太郎が初代県知事になりました。大音県政の評価は大きく2つに分かれています。多くの人を斬首の刑に処すなど恐れられる政治をして明治元年(1868)12月に罷免となった一方、善政もしたと伝わります。

大音は藍園と親交がありましたが、それは大音の師匠、箕輪龍門寺住職・牧野再龍と藍園の親交があったことが元にあります。再龍によると、取水に苦しむ石原村の年貢米を10年間、三分の一減ずるよう大音が裁断したことに感謝して村人たちが彼の石祠を建立し徳を讃えようとしたとし、その手はずを藍園が整えたということです。

大音の善政を忘れないようにするために明治2年に建立された「祭龍祠」は現在も大山祇神社に残っています。また、同社には藍園門下生が石原八景を漢詩に詠み明治19年(1886)に奉納した額も残っています。



石原の総鎮守 大山祇神社



祭龍祠(左)と案内碑(右)

渋川市誌によると、石原地内の三島神社境内にも、大正9年9月建立の「祭龍令大音龍太郎君霊」と記した石碑があり、大音が大正元年11月東京で病没したのを聞いた地元の有志が、彼の遺徳を偲んで建立したということです(地図No.24)。



20 渋川八幡宮

入沢地内

江戸時代の神社は別当寺が管理し神仏習合が行われていましたが、明治維新による神仏分離政策により、八幡宮は神官の手に移されました。

藍園は神官になりませんでしたでしたが、その家を継いだ藤造(藍園孫の堀口ソウの夫)が渋川八幡宮の、藍園の異母弟・貞敬が伊香保神社の神官になったと渋川市誌に記されています。



渋川八幡宮・・・建長年間(1249～1256)に渋川義頭が渋川に館を構えたときに鎌倉の八幡宮を勧請し、康元年間(1256～1257)に白井城主長尾景熙(かげひろ)が上州入国に際しここに社殿を造営、永正年間(1504～1521)に埴田光重が社殿を再造営しましたが天文年間(1532～1555)中に白井に移住したため、入沢氏がそのあとを継いだと伝わります。また、入沢家文書では、寛政年間(1789～1801)は眞光寺末寺の如来寺で管理されていたとあります。

21 堀口藍園翁碑

渋川八幡宮（入沢地内）



堀口藍園翁碑（左）と藍園先生贈位碑

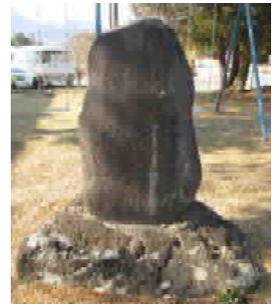
門下から各界に多くの人材が出て、郷に帰り家業を継いだ者のうちには戸長、町村長、議員になった者が多くあり、県議会もそれを「牛耳る者は藍園門下である」と言われた時代があったほどでした。明治24年(1891)に藍園74歳で没したあと、明治26年、藍園門弟と地方官民により「堀口藍園翁碑」が建てられました。撰並書は貴族院副議長 細川潤次郎男爵、篆額は枢密院副議長 東久世通禧伯爵でいずれも藍園と親しい人物でした。大正13年(1924)に藍園へ従五位が贈られたため町を挙げて奉告祭が催され、「藍園先生贈位碑」が建てられました。

22 御蔭の松

御蔭公園内（御蔭地内）

渋川から伊香保への途中、折原に「一本松」という老松があり、明治12年(1872)夏、英照皇太后の伊香保行啓の際、皇太后はこの老松の下で涼をとって松を賞賛されたそうです。藍園は「草も木も碑借りてそその榛原や このいでましの御車のあと」と歌を詠み、皇太后がこの松の下でお休みになったことに感激。これを後世まで伝えようと考え、有志らと話し合って「御蔭の松」と命名し、記念碑を建てるようはからったと伝えられます。明治45年(1912)にこの松は枯れてしまい、現在は、「御蔭の松」の切り株と由緒を伝える石碑とが、御蔭公園に残されています。

御蔭という地名について、「渋川市の地名」では、「(英照皇太后の行啓のとき、) 皇太后大夫の萬里小路博房卿が「芝中の松のやどりに千代かけて残るは君の御蔭なりけり」と詠んだので、地名・樹名となった。」とあります。



御蔭の松の切り株(上)と「芝中の松のやどりに〜」の短歌の碑(下)

23 刀川英学校跡

赤城町見立地内

明治10年代になって、キリスト教の普及や中学校の教科として英語の授業が行われるようになったこと、さらに、明治17~18年の条約改正で、外国人の国内旅行、日本人との同居が認められるようになったことなどから、英語の必要性を国民が認識しはじめました。そのような中、群馬県下でも、英学校や英語塾が設立されました。

藍園は、明治19年(1886)の刀川英学校開校にあたり祝詩を書いて贈り、藍園の祝詩を表装した掛け軸が同校の応接室に数十年後まで掛けてあったと横野村誌に残っています。また、翌明治20年、藍園は甥の小野沢慎吾を同校へ通学させるため、通学の依頼状を宮田の角田儀平治に寄せたとのこと。同じころの渋川では、藍園門下の石坂雄吾（「異母妹・アサが嫁いだ石坂家」参照）が明治20年に長塚町に渋川英語学校を設立したほか、明治16年~32年にかけて4つの英語塾が設立されています。

(その他の御紹介)

◎小栗上野介日記及び家計簿

個人所蔵

県指定重要文化財 昭和31年6月20日指定



小栗上野介忠順^{ただまさ}(文政10年～慶応4年(1827～1868))は幕末期の旗本で、勘定奉行などを歴任しました。戊辰戦争が始まると、主戦論を展開しましたが、退けられて罷免^{ひめん}されました。慶応4年(1868)隠居先の上州権田村で官軍に捕らえられ、取り調べもなく烏川で斬首されました。日記2冊は、慶応3年(1867)から処刑される4日前までのもので、大名や名士の往来の状況が記されています。家計簿は嘉永3年(1850)～文久3年(1863)の間の4冊があります。

上州諸藩の軍事的指揮権のすべてを握った大音龍太郎の命により、藍園の子・堀口文平や後藤八郎右衛門らが権田村に行き、小栗の残した荷物の整理をしました。このとき、大音の許可を得て渋川へ持ち帰られた書物の中にあっただのが、この小栗上野介日記及び家計簿です。この小栗の日記等は、当時朝敵とされた小栗の所有物であったため筐底に秘蔵されていましたが、郷土史研究家の本多夏彦が昭和27年9月、史料調査の折に発見し、世に出ることになったとのこと。

小栗上野介日記及び家計簿に関するお問合せは渋川市文化財保護課(電話52-2102)へ。

(生涯学習課からお願い)

藍園さんは先師や師匠の顕彰に尽力し、お盆などにお祀りやお墓参りをしていたと言います。

それにならい、顕彰展開催に当たっては、今渋川で暮らす私たちの先師とも言える渋川郷学の師匠たちのお墓参りをして、顕彰展を開くことを墓前報告するとともに、大変失礼ながらお墓を写真に収めさせていただきました。

師匠たちのお墓は群馬県や渋川市の指定史跡に登録されているものが多く、敷地内には標識や説明板が建てられていますが、ほかの方のお墓もある墓地内であったり何よりお墓でありますので、お参りするときにはどうぞマナーをお守りくださいますようお願いいたします。

「ゆかりの地めぐり」資料は堀口藍園顕彰展開催に当たって作成した資料に加筆、修正を行ったものです。

○堀口藍園顕彰展開催協力

鈴木喜代様、堀口靖之様、石坂延子様、渋川八幡宮様、渋川北小学校

○堀口藍園顕彰展主な参考・引用文献等

昭和31年群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会発行「群馬県勢多郡横野村誌」/昭和51年11月3日渋川市郷土史研究会発行「郷土渋川第3号」/昭和56年2月1日渋川市発行 歴史写真集「目で見る渋川 明治大正昭和」/昭和56年3月1日岸八一発行 藍園詩鈔 訳・註・書/昭和57年6月30日渋川市郷土史研究会発行「郷土渋川第9号」/昭和61年3月31日渋川市発行「石像物と文化財」/昭和62年3月31日子持村誌編さん委員会発行「子持村誌」/昭和63年3月15日渋川市発行「渋川市の建造物」/平成3年3月31日渋川市発行「渋川市誌第3巻 通史編・下 近代・現代」/平成5年3月31日渋川市発行「渋川市誌第2巻 通史編・上 原始～近世」/平成6年6月30日渋川市発行「まんが渋川の歴史」/平成13年3月31日渋川地名研究会・渋川市教育委員会発行「渋川市の地名」/平成20年6月20日絵と本の木かげ館発行「澁川の華」/平成22年3月1日鈴木喜代編集発行「ふるさと讃歌」(改訂版) /令和3年3月26日渋川市教育委員会発行「新しい渋川第四版」(小学校の副読本) /渋川北小学校資料室所蔵「渋川市教育研究所渋川郷学調査研究部発行 堀口藍園先生物語」の原稿/渋川市HP「旧渋川市地区の指定文化財」(参照 2025-01-24) /渋川北小学校HP「沿革史」、渋川北中学校HP「学校の概要」(参照 2025-01-24)

加筆・修正に当たっては、上記資料を再参照したほか、藍園以外の4人の師匠顕彰展で作成した資料を参考として、引用等を行いました。

むすび

堀口藍園が1891年にその生涯を閉じてから130年以上が経過していますが、今もなお、渋川郷学の師匠たちの足跡は市内の此処其処に残されています。今回の顕彰展でご紹介したもののほかにも、渋川郷学の師匠たちゆかりのもの、渋川郷学関係の人びとが関わった歴史がもっとたくさんあることでしょう。

令和8年2月20日、渋川市は、新市誕生20周年を迎えます。

新「渋川市」の誕生を記念してつくられた「渋川市の歌『力合わせて』」の作詞者は、3番の歌詞をつくるにあたって、「渋川郷学の師匠たちのことを思い浮かべた」と話してくれました。

渋川市の歌「力合わせて」

(3番歌詞)

暮れなずむ 榛名の空に
夢運ぶ 星は瞬き
先人の 教えに 学び
明日の日の 良き事 想う
信じ合い 共に 生きよう
今ここに
文化の 気風 築こうよ
力合わせて

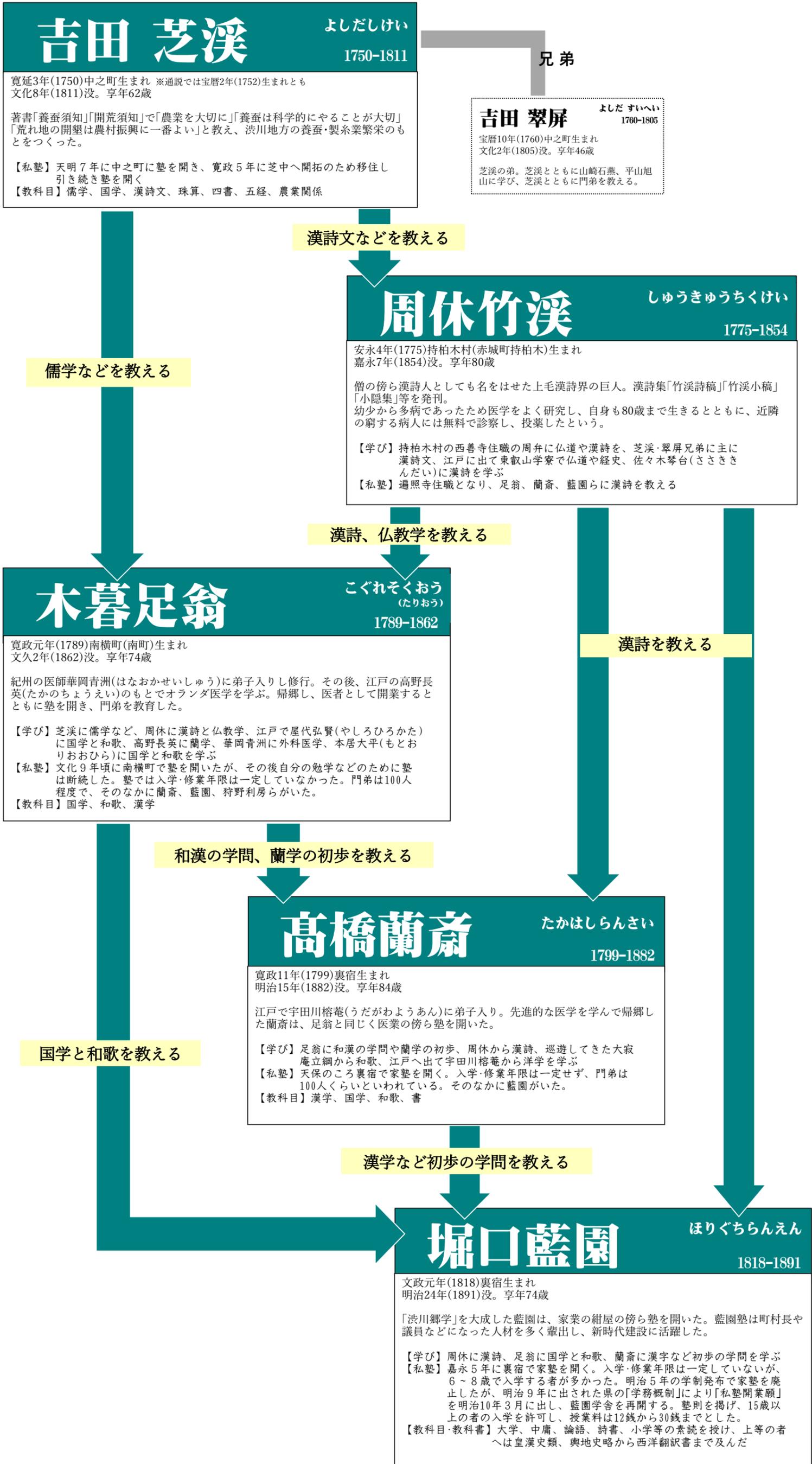
「先人の教えに学び、明日の日の良き事想う」。

渋川郷学の師匠たちは、まさに、明日の日の良きこと、郷土の発展や人びとの幸せを願い、尽力した人物たちでした。

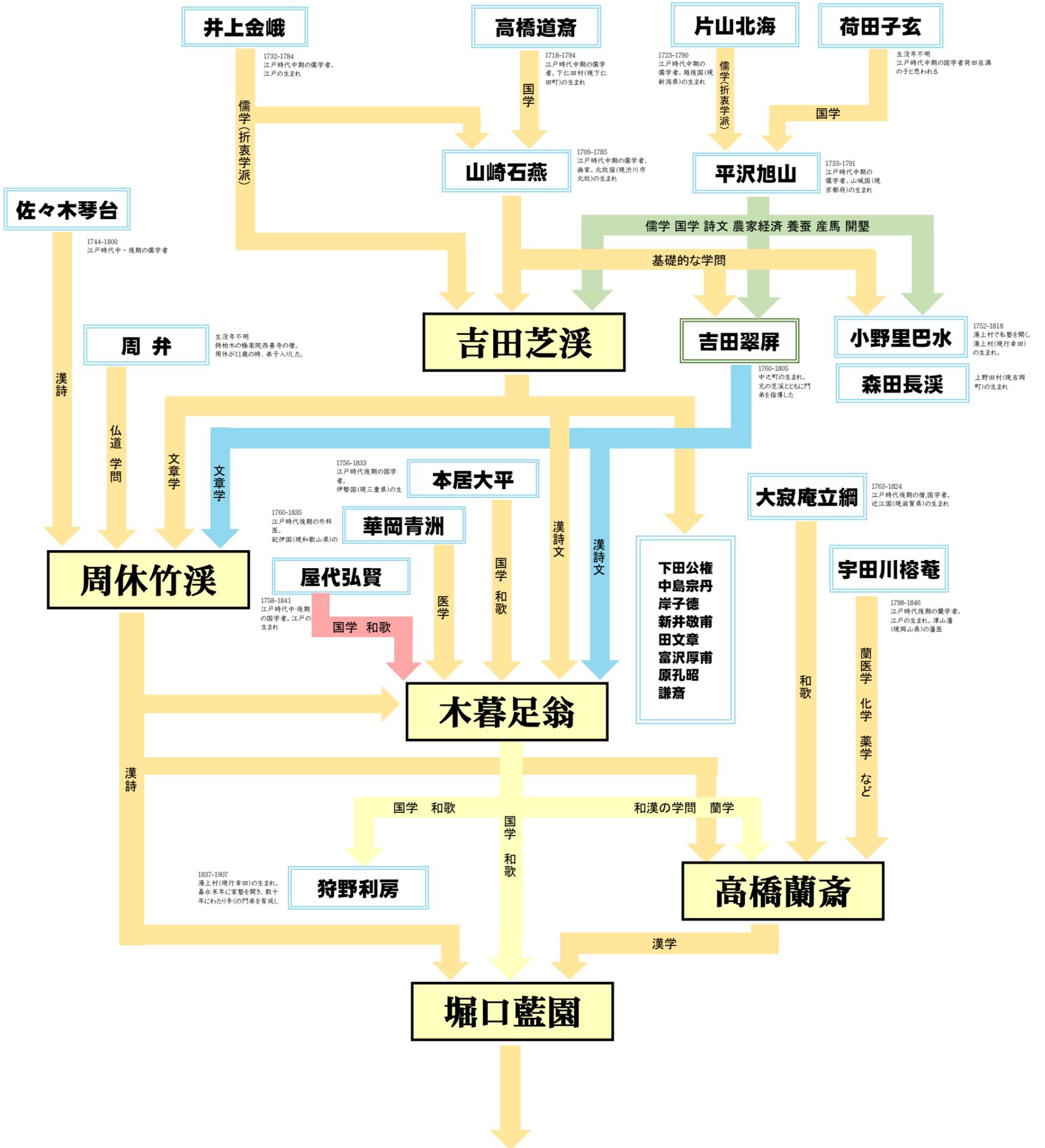
吉田芝溪に始まり堀口藍園が大成したと言われる「渋川郷学」の精神を、渋川に生き、渋川で暮らす私たちの「誇り」かつ「気風」として、次世代へ伝える努力を続けていきたいと思えます。

渋川市教育委員会生涯学習課

渋川郷学5人の師匠 相関図



渋川郷学 師弟関係の系図



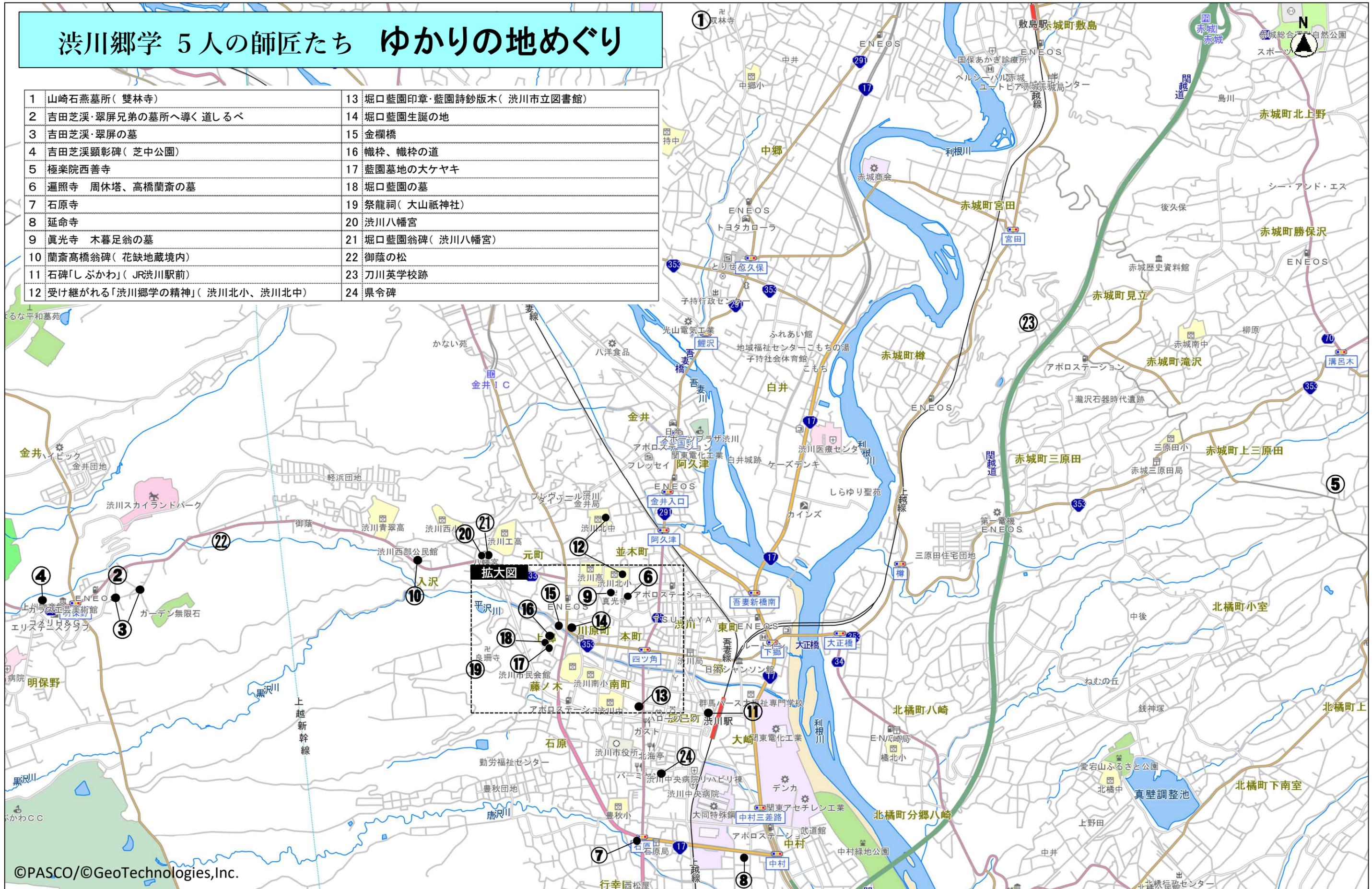
堀口藍園の門下生たちの活躍

堀口藍園の門下生からは、各界に多くの人材が輩出された。故郷に帰り家業を継いだ者からは、戸長、町村長、議員になった者が多い。県議会もそれを牛耳る者は藍園門下であるといわれた時代があった。

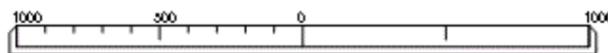
5人の師匠たちの教育は多くの門弟をとおして地方の、ひいては国家の隆運に大いに貢献したのである。

渋川郷学 5人の師匠たち ゆかりの地めぐり

1 山崎石燕墓所(雙林寺)	13 堀口藍園印章・藍園詩鈔版木(渋川市立図書館)
2 吉田芝溪・翠屏兄弟の墓所へ導く道しるべ	14 堀口藍園生誕の地
3 吉田芝溪・翠屏の墓	15 金欄橋
4 吉田芝溪顕彰碑(芝中公園)	16 幟杵、幟杵の道
5 極楽院西善寺	17 藍園墓地の大ケヤキ
6 遍照寺 周休塔、高橋蘭齋の墓	18 堀口藍園の墓
7 石原寺	19 祭龍祠(大山祇神社)
8 延命寺	20 渋川八幡宮
9 眞光寺 木暮足翁の墓	21 堀口藍園翁碑(渋川八幡宮)
10 蘭齋高橋翁碑(花缺地蔵境内)	22 御蔭の松
11 石碑「しぶかわ」(JR渋川駅前)	23 刀川英学校跡
12 受け継がれる「渋川郷学の精神」(渋川北小、渋川北中)	24 県令碑



縮尺 1 : 25000



平成18年2月20日の市町村合併により、新^{しん}潟^し川^{かわ}市^しが誕生^{たんじょう}しました。新^{しん}潟^し川^{かわ}市^しを記念^{きねん}してつくられたものの中に、「^し潟^{かわ}市^の歌^{うた}『^ち力^{から}合^あわせて』」と「^し潟^{かわ}市^民憲^{けん}章^{しょう}」があります。あらためてここに紹介^{しょうかい}します。

潟^し川^{かわ}市^の歌^{うた}「^ち力^{から}合^あわせて」

作詞^{さくし}：新^{あら}井^いみ^つを 作曲^{さつぎやく}：金^{かな}井^い三^さ郎^{ろう}

- | | | |
|--|--|--|
| <p>1 明^あけてゆく 赤^{あか}城^ぎの嶺^{みね}に
幸^{しあわ}せの 白^{しら}雲^{くも}湧^わいて
風^{かぜ}わたる 利^と根^ねの川^{かわ}面^もは
夢^{ゆめ}乗^のせた 笹^{ささ}舟^{ふね}運^{はこ}ぶ
緩^{ゆる}やかに 過^すぎし年^{とし}月^{つき}
今^{いま}ここに
新^{あら}たな時^{とき}代^{ひら}を 開^{ひら}こうよ
力^{ちから}合^あわせて</p> | <p>2 緑^{みどり}なす 子^こ持^{もち}小^お野^の子^こに
燦^{さん}燦^{さん}と 陽^ひは降^ふり注^{そそ}ぎ
湯^ゆけむりを 透^{すか}して見^みれば
若^わ人^{こうど}の 歡^{こえ}声^{あふ}は溢^{あふ}れる
遅^{たくま}しく 大^{だい}地^ち踏^ふみしめ
今^{いま}ここに
未^み来^{らい}の地^ち図^ずを 描^{えが}こうよ
力^{ちから}合^あわせて</p> | <p>3 暮^くれな ず 暮^はる 名^なの 空^{そら}に
夢^{ゆめ}運^{はこ}ぶ 星^{ほし}は瞬^{また}き
先^{せん}人^{じん}の 教^{おし}えに 学^{まな}び
明^あ日^すの 日^ひの 良^よき 事^{こと}想^{おも}う
信^{しん}じ合^あい 共^{とも}に 生^いきよう
今^{いま}ここに
文^{ぶん}化^かの 氣^き風^{ふう} 築^{きず}こうよ
力^{ちから}合^あわせて</p> |
|--|--|--|

潟^し川^{かわ}市^民憲^{けん}章^{しょう}

平成^{へいせい}23^{ねん}年^{にち}2^{せいてい}月^い20^{にち}日^{せいてい}制^い定^{にち}

日^に本^{ほん}のま^まな^なか 風^{かぜ}薫^{かお}る 潟^し川^{かわ}
わたしたちは、赤^{あか}城^ぎ・榛^{はる}名^な・利^と根^ね川^{かわ}の景^{けい}勝^{しょう}を はじめとした
豊^{ゆた}かなる自^し然^{ぜん}環^{かん}境^{きやう}と いで湯^ゆに感^{かん}謝^{しゃ}し、や^{やす}ら^らぎと創^{そう}造^{ぞう}力^{りよく}に満^みちた
魅^み力^{りよく}あ^あるま^めちを 目^め指^さして、この市^し民^{けん}憲^{けん}章^{しょう}を 定^{さだ}めま^ます。

- 一 心^{こころ}と 体^{からだ}を 鍛^{きた}え 健^{けん}康^{こう}で 明^{あか}る^くい 暮^くら^らしを 目^め指^さしま^ます
- 一 家^か族^{ぞく}の 和^わを 大^{たい}切^{せつ}に 思^{おも}い^{ひろ}や^{ひろ}りの 心^{こころ}を 広^{ひろ}げま^ます
- 一 働^{はたら}く 喜^{よろこ}びを 持^もち 郷^{きやう}土^どの 発^{はつ}展^{てん}に 努^{つと}めま^ます
- 一 芸^{げい}術^{じゆつ}を 育^{はぐく}み 文^{ぶん}化^かを 伝^{でん}承^{しょう}し 教^{きやう}養^{よう}を 深^{ふか}めま^ます
- 一 信^{しん}じ 合^あい 助^{たす}け 合^あい 安^{あん}全^{ぜん}で 住^すみ よ^よい ま^まちを 創^{つく}りま^ます

※ 潟^し川^{かわ}市^民憲^{けん}章^{しょう}は、「市^し民^{けん}の 皆^{みな}さん^{けん}が よ^より^よい^よっ^よす^よの 連^{れん}帯^{たい}感^{かん}を 持^もち、豊^{れき}かな 自^し然^{ぜん}と 歴^{れき}史^しや 文^{ぶん}化^かを 未^み来^{らい}に 伝^{つた}え、明^あ日^あの 潟^し川^{かわ}市^の発^{はつ}展^{てん}を 願^がう 心^{しん}を 育^よむ 事^{こと}」を 目^も的^{てき}に、平^{へい}成^{せい}23^{ねん}年^{にち}2^{せいてい}月^い20^{にち}日^{せいてい}、合^が併^つ5^{しゆう}周^{ねん}年^{きねん}を 記^せ念^{いてい}して 制^{せい}定^{いてい}さ^いれま^いした。

